

蒼の彼方のフォーリズム  
ム 天を翔く翼

八雲ルイス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

約15年前に発見された半重力子、通称アンチグラビトンによって限定的ながら人は自ら空を飛ぶことを覚えた。

そのために使われるのがアンチグラビトンシューズ、略してグラシユで、それを履くことによって自由に空を飛べる。

その技術がスポーツへと応用されたのもある意味では必然だった。フライングサーカス、300メートル四方で設置されたブイをタッチ、もしくは相手選手の背中をタッチすることで得点を稼ぎ、それを競うイギリス発祥の新しい競技だ。

日本でも仇州の四島と呼ばれる地域で最も盛んに行われ、日本国内でも人気は高まり

つつある。

スカイウォーカーと呼ばれるフライングサーカス選手……特に現役高校生の世代の皆が憧れ、彼を目指したスカイウォーカー、日向晶也。彼は彗星の如く現れ彗星の如く消えた幻の選手となつてしまった。

これはそんな彼と一度だけ対戦したこともあり、日向晶也が消えた後に頭角を現し、プロに最も近いスカイウォーカーと言われるようにまでなつた少年の物語である。

# 目次

第0話	俺は空が好きだ	—	1
第1話	燃えてきました!		9
第2話	驚いた……		28
第3話	煉獄………完食???		47
第4話	スピイダーの人なのかな		
71			
第5話	え?100周がいい?		89

## 第0話 俺は空が好きだ

——俺は空が好きだ

小学校に入学する前から暇な時はよく空を見上げていたし、初めて飛行機に乗った時なんかはずっと窓の外の風景ばかりを見ていた。指導員の資格を持つていたお袋とはよく一緒に空を飛んだりもした。近くに自由に飛べる場所がなかったから、少し遠出して専用の施設に行かないといけなかったのが玉に瑕だが。今思えばフライングサーカスという競技に俺が興味を持ったのも、当然といえば当然だったのかもしれない。

初めてフライングサーカスの試合を見たのは小学4年の時だ。親父がフライングサーカスの公式審判員の仕事をしていたのもあって、親父が審判をするフライングサーカスの大会をお袋に連れられて観戦に行った。当時はすごく興奮したのを今でもよく覚えてるし、それから何度も親父の仕事先について行っはフライングサーカスを観戦した程度にはのめり込んでいた。

1 番印象的だった試合はやっぱり初めて見に行った大会のあの試合。仇州の四島と呼ばれる日本で最もフライングサーカスが盛んなそこで見た、確か組み合わせは……：

神代龍月対各務葵。

「……………すっげえ」

夏の大会だったらしく、他にもたくさんさんの試合を観戦したが、この試合だけは息を飲んで見入ってしまった。他の試合はあんなに興奮していたのに、だ。後にも先にもこんな経験はこの時だけだった。

小6の12歳になった時は誕生日プレゼントで貰った競技用グラシユ、MIZUKI社の飛燕二型を早く使いたくて、最近近場にできたフライングサーカスのクラブに入った。練習場として使っている施設は海沿いであって、東京ドームくらいの広さのブイに囲まれた指定された範囲内なら海の上を自由に飛べる。練習のない日は一般開放されていて、練習の日はその時間だけ貸切にするシステムで、俺は練習の日はもちろんのと、練習のない一般開放の時間も日が暮れるまでそこで飛び、自主練に明け暮れていた。それだけ飛ぶのが楽しかったし、フライングサーカスにハマっていた。ちなみにスタイルは色々試した結果、スピーダー。本来ならオールラウンダー向きの飛燕二型をスピーダー向きにカスタマイズして使ってた。

自分で言うのも何だけど、俺は結構強かった。フライングサーカスを始めて最初の大会では（そもそもこの地区があまり活発でなかったのもあったが）地区大会はぶっちぎりの優勝。その勢いのまま全国大会まで勝ち進み、結果はベスト8。その試合の対戦相

手は……：確か仇州の四島つてとこから出場した日向晶也。その師が各務葵選手だったのもあるだろうが、何より彼自身の実力は凄かった。スピードだけは勝っていたが、技術や戦術という意味では完敗だった、そう思う。これが俺の最初の勝利の美酒と敗北を味わった瞬間となった。

この敗北をきっかけにして俺は更にトレーニングを重ねた。いろんなスカイウォーカーの試合動画を研究して、俺のスタイルに使えるようなものをピックアップ、それをひたすら練習。これを繰り返した。経験についてはどうしようもないが、独学なりに技術はついたと思うし、クラブのコーチからも評価されていた。

そして迎えた3月。小学校の卒業式。式が終わったらすぐに両親と一緒に飛行機に乗った。行先はイギリス。俺の卒業祝いと仕事で忙しくて半年間祝えなかった全国大会ベスト8祝いでフライングサーカス発祥の地、イギリスに来たってわけ。それにイギリスは俺が初めて見た試合の神代龍月選手が普段プロとしてプレイしている国。正確には2年前のあの時で既にプロだったが、あの大会の時はたまたま別件で帰国していた、タイミングがあつたから出場していただけらしい。ちなみに当時神代龍月選手は18歳。その彼のプロの試合を観戦、俺にとっては最高のプレゼントだった。

だが、この旅行が俺の人生の転換期となってしまう。

旅行3日目。その日は大会初日。ただの観客の俺と違って、公式審判員の親父は当

然、その手伝いでお袋も先に会場入り。俺はのんびりホテルで昼食を済ませてから会場へ向かうつもりだった。両親が関係者というのもあって、幸いホテルは会場とそんなに離れてはおらず、まだまだ小学校卒業したばかりの俺一人でも迷わず会場へ向かうことは可能だったし、ホテルにも日本人スタッフはいたので（ホテル内にいれば）言葉もあまり不自由はしなかった。

当初の予定通り俺はホテルのレストランで昼食をすませ、一通り用意をしてからホテルの外へ。そこで俺は違和感を感じた。何やら周りの人が騒がしい。いや、元々賑やかな場所ではあったが、そういう話ではない。英語ばかりで何を言っているのかは理解出来なかったが、フライングサーカスの試合会場へと向かう人が多いのと、アクシデントという単語がちよくちよく耳に入ることから、試合会場で何かあったのだろうと察した俺もそこへと向かう。

トラックの突発的な故障だったらしい。走行中のトラックが突如制御不能となって近くにあった建物に突っ込んだ。その建物が今日から行われるフライングサーカスの試合会場本部だったのもたまたまだし、そこがスタッフルームだったのもたまたまだが、そのたまたまが最悪の事態を引き起こした。

俺の両親がその事故に巻き込まれた。俺がその場所に着いた時には現地警察が既にバリケードを引いていて俺は近寄ることすら出来なかったが、遠目に倒れている両親は



見えた。俺は必死に抵抗し、そのバリケードを突破しようとしたが、所詮当時の俺は子供で相手は複数人の大人、それも鍛えられた警察だ。出来るはずもなかった。話せばわかってくれたかもしれないが、生憎当時の俺はそれが出来るほど英語が堪能ではない。「君は……そうか。なるほどな。君が彼らの」

その時に口添えしてくれたのが神代龍月選手。現場の指揮者であろう人を通じて、俺が被害にあつた2人（正確には被害にあつた人はもつといるが）の肉親だと、俺を取り押さえている警察官の人へ伝えてくれた、と後に俺は聞いた。その時の俺からしたら唐突に拘束を緩めて通してくれた、程度の認識だったが。

結果として、その事故によって俺の両親は帰らぬ人となつてしまった。当然この事故によって試合は中止となり、俺は1人日本へと帰国した。両親の葬式は日本のフライングサーカス連盟が執り行ってくれたし、事故を起こしてしまったトラックの会社からも慰謝料が入ったが、正直どうでもよかった。たった数時間もしないうちに俺は天涯孤独となつてしまい、そのシヨックの方が大きかったからだ。俺の歳を考えれば当たり前だが、当時の俺の心の拠り所は両親による所が大部分であった。親父もお袋も仕事を家を空けることが多かったこともあつて思い出らしい思い出は一緒に空を飛んだことやグラシユを買ってもらつたこと以外はパツとは出てこない。が、それはそれで充実していた。

そんな親父とお袋がいなくなつて、俺の心にはポツカリと穴が空いたような、そんな気がした。夜は泣いて過ごすことが増え、食べ物も喉を通らなくなつた。もちろん以前は毎日のように空を飛んでいたのも、全くしなくなつた。

そんな生活を1週間も続けたところでとうとう俺は倒れ、病院へと運ばれた。栄養失調と診断された。ま、そりやそうだ。たまに水は飲んでたけど、ろくに何も食べてなかつたんだからな。精神的な負荷もあつて余計にそうなつていたらしい。

入院生活を続けて4月半ば。同級生は皆中学校へと進学したが、俺は相変わらず回復していなかつた。まだ食べ物も喉を通らず、栄養を点滴。四六時中寝て過ごす日々。たまにテレビで見るフライングサーカスが俺を正気でいさせてくれていたんだと思う。そんな時、彼が俺の前に現れた。

「遅くなつてすまない。すぐに駆け付けたかつたんだが、スケジュールが立て込んでてな。こんなことなら無理矢理にでも来ればよかつた」

「か……………神代……………龍月、さん？」

そう、フライングサーカスでプロとして活躍する日本人、神代龍月選手。なんでこんな所に？と出てきた疑問はすぐに解決した。なんでも、件の事故の時、たまたま俺の両親の近くについて、最期を見届けてくれたのが彼だったらしい。親父は何度も彼の試合をジャツジし、彼の身元もはつきりしていて信頼出来る。不躰とはわかつてはいたが、そ

の時に俺の事を託して息を引き取った、とは後に聞いた言葉だ。

「だから、俺が面倒を見よう。君の両親の代わりになる、とかそんな大層なことは言わない。責任とか贖罪とかそういうのでもない。が、たまたまとは言っても俺はあの2人を看取って、君のことを託されたからな。君が望むならフライングサーカスを教えてあげよう。よく言えば恩返し、悪く言えば俺の気まぐれ、そんなところかな」

もしこれを受ければ、今まで過ごした日本から離れることになるし、当然友達とも別れることとなる。が、それを差し引いても悪い話ではないように思えた。だが、俺は直ぐに答えることが出来なかつた。日本に未練があるわけでもないし、別れたくない人がいるわけでもない。単純に両親の死という現実が俺に重くのしかかり、翼を閉じさせていた。

「……………ま、これも仕方ないことか。心の支えを失ったんだ。なら、最後にこれを君に伝えておく。ご両親が亡くなる間際、君へ向けて遺した言葉だ」

「……………え？」

「空を愛し、空を見上げろ。翼を広げて空を翔べ。答えは全てそこにある」

俺の人生の転換期となったこの事故。良いか悪いかで言えば決していいことではなかつた。むしろ最悪の出来事と言ってもいい。が、だからといって俯いては何も始まらない。どんな悪夢も受け止め、前を……………いや、空を見上げる。そして俺は……………

手を取った。

これが俺、

天野あまの空翔そらとの生い立ちだ。

つつても、4年前の、だがな？

## 第1話

## 燃えてきました!

— 4年後 10月

side 晶也

あれから日本の……いや、世界のフライングサーカス、略してFCは変わっていった。いや、ルールが変わったわけじゃないんだ。変わったのは風潮。暗黙の了解とも言われていたもの……とでも言えればいいのかな。

FCをする上で必須なのがグラシユだけど、その原理はメンブレンと呼ばれる反重力子の膜で自身を覆い、その力で浮き上がる。飛行する時は反重力子によって浮き上がる。うとする力と重力によって落ちようとする力を、メンブレンの厚みをコントロールしてやることで進む。各務先生も使った例えはリニアモーターだったかな。

基本的なところは競技用も一般用も同じだけど競技用はその感度が高いという違いがあつて、より細かいコントロールが出来るようになってる。

そんなグラシユにはバランスというものが備わっていて、基本的にはこれを入れた状態で使う。仮にこれを外せばメンブレンの感度は極限まで高まり、より細かくより繊細、かつ大胆な動きすらも可能とさせる。けど、誰もこれを外さない。それは何故か？

答えは単純で、誰も敏感になりすぎたメンブレンをコントロール出来ないから。要はリミッターみたいなものだね。

練習中にグラシユの設定をいじって、間違えてバランスを外したままにしまった真白がそうであったように、ほんの少しの動きでもメンブレンはそれを察知、反応してしまつて制御を失う。安全装置は働くし、メンブレン同士は反発するから地面や周りの人に激突することは無いけど、危ないことに変わりはない。そんな理由があつて、バランスは外さない、がスカイウオーカー内での暗黙の了解だつた。

それを覆したのはつい2カ月前の四島で行われた秋の大会決勝。組み合わせは倉科明日香VS乾沙希。試合時間ラスト3分で乾が試合中にバランスを解除(そういう操作の出来るグラシユだつたらしい)、その後の延長戦では明日香もバランスを解除。ぶつつけ本番の明日香は最初こそコントロールを失つて海に墜落したけど、直ぐに立て直して完璧にコントロールしてみせ、結果勝利をもぎとつた。それ以降、日本各地でバランスを外す選手が増えていった。各務先生の話では世界単位でも増えていったらしい。かく言う俺も明日香に触発されて選手へ復帰して練習中。

今まで誰も見た事のなかつたバランスを外したものの同士の試合は、見た者全員の心を奪い、憧れさせた。当然、その後の全国大会でも明日香はバランスは外したまま挑み、相手も何人かはバランスを外した選手がいた。明日香以外は例外なく使いこなせ

ておらず、むしろグラシユに文字通り足を引つ張られて普段の力を出せていなかったわけだが……。かと言ってバランサーを入れた状態では、外した状態の明日香に太刀打ちできるはずもなく、結果として明日香は順調に勝ち進んでいき、危なげなく全国大会を優勝した。

そして迎えた世界大会。今回の会場はイギリスのとあるビーチ。どうしても一緒に来れないという各務先生の代わりに、白瀬スポーツの白瀬隼人さんが同伴しての会場入り。開会式なども滞りなく終わり、先程1回戦が一通り終わったところ。さすが世界大会ともなると相手のレベルが違う。明日香や乾レベルとは言わないまでも、1回戦のカナダ代表の選手はバランサーオフを使いこなしていて、明日香もそこそこに苦戦。久々のバランサーを外した者同士のまともな試合となったが、結果は明日香の勝利。

「次の相手は……。イギリス代表かな」

「優勝候補筆頭ですからね。間違いなく厳しい試合になりそうですね」

「晶也さん、白瀬さん、イギリスってそんなに強いんですか?」

F Cの試合は1試合にそんなに時間は掛からないので、1人当たり1日に複数試合こなすのはよくあることで、次の2回戦は2時間後の16時頃。今日の最後の試合になる。これに勝てばベスト16。まだまだ先は遠いけどね。

で、次の明日香の対戦相手を確認していた白瀬さんがいち早く教えてくれた。横から

ひよこつと出てきた明日香はまだ分かってなきさそうだったけど。

「前にも言ったと思うけど、イギリスはフライングサーカス発祥の地。つまりFCの原点だ。発祥つてことはそれだけFCに長く取り組んでいる。十分なアドバンテージだな」

「事実今までのジュニアとプロ、どちらもイギリスが世界1をほぼ独占しているね。毎回ではないけど、過去5年はイギリスだけだね。ほら、明日香ちゃんが決勝で戦った乾沙希とイリーナ・アヴァロン。彼女達も元々イギリスでプレイしていたそうだしね」

「なるほど〜」  
俺の説明に白瀬さんが補足をしてくれる。とりあえずは明日香もイギリスが強いということとはわかってくれたみたいだ。

「けど、明日香にはバランサーオフを完璧に使いこなしているって大きなアドバンテージがある。勝てないことは無い！」

「はい！頑張ります！つと、ところで、そのイギリス代表の方はどのような選手なんですか？」

「え？あ、ちよつと待つて。調べるから」

つと、いけないいけない。相手選手のこと、イギリス代表つてこと以外調べてなかった。俺は各代表のプロフィールや参考動画が載っている大会ホームページにアクセス



しようと、スマホを取り出して操作をし

「イギリス代表はソラト・アマノ。スタイルはスピーダーだよ」

ようとしたところで白瀬さんから助け舟。白瀬さん知ってたんだ?

「1回戦の時、イギリス代表の試合と僕達日本代表の試合は同時に行われていたからね。晶也君はセコンドで動けないから、僕が代わりに見てきたんだ。個人的にも気になってる選手だしね。その時の試合、撮ってあるから控え室で見よつか」

「はいー」

この時、俺と明日香は知らなかった。そのソラト・アマノがどれだけヤバい相手なのか、ということを知った。

side out

side

沙希

一方の日本。今は23時をさつき過ぎた頃。イギリスでは15時過ぎだから明日香

の次の試合まで1時間を切った。

「みさき先輩、そっち行きましたよ!」

「私も援護するので、やっちゃってください!」

「罨、置いておいた。ここで決める」

「よーっし、罨にかかった!爆弾置いて……………ドーン!」

で、私はと言うと久奈浜FC部のみなどと高藤FC部の一ノ瀬莉佳をイリーナが招待して一緒に明日香の観戦。今は明日香の次の試合待ちで、久奈浜の有坂真白が持ち込んだモンスターイーター（略してモンタッタ）をプレイ中。家主のイリーナは久奈浜のマネージャー（兼部長）の青柳窓果と2人で調べ物。窓華は単純にゲームの輪からハブラれただけなんだけど。4人マルチだから。

「なっ!?!」

と、ちょうどこちらのゲームの方が一段落したところで、パソコンで調べ物をしていたイリーナが、なんでもか顔を強ばらせて立ち上がっていた。一緒にゲームしていたみさき、真白、莉佳もビックリしてイリーナを見る。

「あ、えつと、ごめんなさいね。少しびつくりする情報見つけちゃって……………あはは」  
「びつくりする情報?……………っ!?!」

「えくになになに?次の明日香の対戦相手でしょ?イギリス代表の……………ソラト・アマノ

? 誰それ?」

そう、ソラト・アマノ。私とイリーナにとって、これは衝撃的な情報だった。

「その人イギリス代表ですよね? なんとというか……あまりイギリスっぽい名前じゃないですよね?」

「だよな? どちらかと言えば日本人みたいな名前だと思う」

「正解。ソラト・アマノ……分かりにくいから天野空翔って呼ぶわね。天の野原で天野、空を翔くで空翔よ」

「がつつり日本人だよな? その人」

上から莉佳、真白、みさきの疑問で、途中答えてるのはイリーナ。まあ、確かに最もな疑問だと思う。

「あ、そこは私が答えるね? えーっと、4年前……私やみさきと同年だから……中1の時にイギリスに引越して、プロスカイウォーカーの神代龍月選手の元に弟子入り………だった」

「神代龍月選手?!?!」

窓果がスマホを覗き込みながら補足説明をしたところで、ガタツと音を立てて身を乗り出したのは莉佳。隣の真白がすこし引いてる。

「り、莉佳? どうしたの?」

「どうしたの、じゃないよ！神代龍月選手と言えば日本最強と言われるスカイウォーカーで、特にスピードラーとしては伝説！今はなんでかオールラウンダーに転向してるけど、それでもその強さは変わらない、着いたあだ名が蒼空の覇者！なんで真白は知らないの!？」

「いや、私FC始めたばかりだし」

「ちなみに私がFCに興味持ったのも神代龍月選手がきつかけだね」

訂正。ドン引きする真白をよそに興奮して熱弁する莉佳。みさきは興奮こそしてないけど、莉佳サイド。さりげなくタブレットで今やつてる神代龍月選手の試合（明日香の出てるヤツと同じ会場でプロ部門の世界大会）を流してて、片耳イヤホンで音も聞いている。ゲームしながら見たの？このゲーム音もかなり重要なはずなのに、それを片耳で、しかもプレイングも凄かったのに？この子すごい。

知らなかったのは真白だけという事実にも、真白は項垂れてる。同じ学生目線での目標が過去の日向晶也なら、誰もが憧れるプロ選手代表はこの神代龍月選手ってことになる。実際私もそうだった。

「私もイギリスにいた時に1年半程だけど、弟子入りしてたことがある。その時出会ったのが天野空翔。言うなれば私の兄弟子にあたる」

「当時はバードケージはまだ未完成で、完成してからも見せてはいないけど………恐ら

く彼には通用しないでしょうね」

「何でー? 実際バードケージされた私が言うけど、それこそ私がしたように背面飛行するとか明日香みたいに背中取らせないように立ち回りながらバチバチするしかないくない?」

「ごもつとも。私のバードケージの理論は単純で初動で相手より上を取って、そこから常に背中を狙える位置をキープしつつ水面まで誘導し、焦って上昇してもそもそも私のスピードなら急加速の上昇程度なら追い付けるから、無限ループに入る、というもの。みさきが言った2つの対応策以外なら初動で上を取らせない、というものもある。要は私にショートカットさせれば、不可能ではないにせよ、簡単にはバードケージにはハマらなくなる。けど、それは理論上不可能。その窓華の兄、青柳紫苑がそうであったようにスピードである私を超える速度を出せば簡単には曲がれない。結果、そこにつける隙ができる。単純な速度勝負なら私はそうそう負けることも無いし。」

「えつと、つまり?」

「彼は私に初動でショートカットさせるだけの速度を出せて、バードケージにハマようとしても振り切られる。下手に上を取ろうと上昇すれば、その隙に置いていかれてブイタッチだけで大差をつけられる。ブイタッチによる得点を極めに極めたスタイル」

「補足すると、それならドッグファイトに持ち込めば、と思うかもしれないけど、彼はそ

れを振り切るのも上手い。この辺りは師匠の影響が出てるわね」

イギリスにいた当時、私の第1の目標だった空翔（最終目標は神代龍月選手）には私は何度も試合を挑んだ。けど、1度も勝ったことは無い。練習の為、とファイターやオールラウンダー用の設定にしたグラシユを使用していた時は普通に勝てるけど、それでも空翔は食らいついてくる。とは言っても、スピイダー以外は私達の年代の平均的な実力に毛が生えたくらいではあるけども。

「その圧倒的な速度とスタイルからイギリスで着いたあだ名が流星<sup>Meteor</sup>。最もプロに近い日本人高校生」

「勝機があるとすれば………バランサーオフを明日香が使いこなしている点かしら」

明日香とも言えども今までみたい簡単にはいかない。バランサーオフのアドバンテージは確かに大きい。けど、何か嫌な予感がする。試合開始まで………あと5分。

side out

side 明日香

「……………という訳だ。これが僕の知る限りの天野空翔の強さだよ」

「す、凄いな……………まさかあの乾が勝ったことがないレベルとは」

「うう……………」

私と晶也さんは白瀬さんから次の対戦相手、天野空翔さんのビデオを見させてもらうついでに、彼について解説してもらいました。正直ビックリです。沙希ちゃんの兄弟子ってだけでも凄いのに、その師匠があつた神代龍月選手! FC始めて、色々調べるうちに神代龍月選手のことを知ったんですけど、私、すぐに大ファンになってしまいました!もしかしたら神代選手来てないですか? サインももらえませんか? ……………つととと、いけないいけない。今は試合のことに集中しないとですね!

沙希ちゃんが敵わない程の相手、こつちも楽しみです!

「ワクワクしてきました!早く試合したいです!」

「そ、そんなに前のめりにならなくても試合は逃げたりしないからね?」

「あはは、そうでした。けど、そんな強い日本人選手でなおかつ神代龍月選手の一番弟子なんですよね?なんで日本では知られてないんですか?」

私が今話を聞いて率直に思った疑問。なんで天野さんは日本では無名なのか……………師匠さんがあんなに有名で、それ相応の実力も持っているのに。なんでなんです

かね？

「簡単だよ。彼はプロに近い、ってだけでプロじゃないからさ。サッカーでもJリーグのジュニアチームがニュースになることはほとんどないだろう？それと同じだよ。プレーしているのがイギリスだから尚更ね」

「明日香の balanサーオフみたいに公の場で今までの常識を覆すようなプレーをした、とかならともかく、彼はそういうのはないからね」

「私ってそんなに有名なんですか？」

「当たり前だ、とチョップを頭にもらってしまいました。痛いです。」

「balanサーオフってのは今までのFCの常識を覆すレベルの大事件だ。その発端の明日香と沙希が有名にならないわけが無いだろう？今では全世界での試合動画を研究されてると思うぞ」

「逆に言えば、今回の天野空翔選手との試合もそこが明日香の唯一の勝機と言ってもいいね。4年間プロから直接教えを受けているから、経験や技術で勝機はほとんど無いと言っている。もつとも、それはこの試合に限った話じゃないけどね」

私はFC始めてまだ半年経ってないですもんね。仕方ないです。

「そんなことより、ほら明日香。もうすぐ試合だ。行くぞ」

「はい！晶也さんもセコンドよろしくお願いしますね！」



「任せとけ。必ず勝たせてみせる」

ちようどそこで次の私の試合のアナウンスが入って、私と晶也さんは控え室を出ていきました。

「唯一の勝機、か。本当にそうだといんだけど……」

私達を見送る白瀬さんの眩きが私達に届くことはありませんでした。

side out

「んっ、ふうー……」

俺はイギリス代表の天野空翔だ。この4年間で色々と努力をして、丁度2年前の夏から師匠に弟子入りした沙希ちゃんとも一緒に切磋琢磨し、俺はこの場所に立つことが出来た。沙希は今年の6月に日本に帰っちゃったけど。

1つ予想外だったのは、つきり日本代表として上がってくるのは沙希ちゃんだと

思っていたんだけど……動画によれば今隣でストレッチしている倉科明日香（明日香ちゃんではないか）に負けたらしい。

「あ、はわわわ」

と、俺もストレッチしながら横目で明日香ちゃんを見てたら、たまたま目が合つてしまつて明日香ちゃんはしどろもどろ。

「え、えーつと？ ないすとうーみーつー？」

「よろしくね。それと、日本語で良いよ？ とりあえず深呼吸しよつか？」

「あ、はい。すみません……すう……はあ……」

うん、なんとか落ち着いたみたいだ。

「倉科明日香って言います！ 今日にはよろしくお願いしますっ！」

「お、おう。天野空翔だ。よろしくな、明日香ちゃん」

地面と並行になるんじゃないかってくらい深くお辞儀する明日香ちゃん。たぶん、真面目な子なんだろうな。

「明日香ちゃん、俺の妹弟子に勝つたんだって？」

「妹弟子……？ ああ、沙希ちゃんのことですか？ はい、沙希ちゃんすごく強かったです。もしかして……恨んだりしてます……か？」

「ん？ 何で？」

「私が勝たなければここに立っていたのはたぶん沙希ちゃんですから……: ……大切な妹弟子なんですよね?」

うん、訂正。真面目すぎる子だ。この子も嫌味とかで言ってるんじゃないのはわかるから、つついっ笑ってしまった。

「なんで笑うんですかつ?!」

「とと、ごめんごめん。別に恨んだりはいしないよ。明日香ちゃん、反則とかしたのならともかく、正々堂々戦って、その上で沙希ちゃんが負けたんなら恨む理由はないよ。明日香ちゃんの方が強かった、それだけだね」

「あ、ありがとうございます!」

「ま、今は俺らの試合を楽しもうや。先に行ってるよ。クリアードフォー・テイクオフ」  
明日香ちゃんに断りを入れてから、俺はグラシユの起動キーを発声して浮上。ファーストブイまで行く。途中、俺のセコンドから何を話してたのか聞かれたから、世間話とだけ答えて置いた。間違ってるないしね。

ちなみに俺のセコンドは俺が通ってるハイスクールの同級生。FCの知識があつて、FCクラブでセコンドの経験もあつたから、イリーナの日本行き後は師匠が雇つたつて形でセコンド頼んでる。指示とかもすごい的確かつわかりやすく優秀な子。今回に限ってはイリーナ呼んでもよかつたけど、わざわざ来てもらうのもアレだし、止めた。

これは余談だけど、俺は中学は日本語学校だったけど、今は普通のハイスクールで、生活含め全部英語。

「待ってくださーい」

俺から少し遅れて明日香ちゃんもファーストブイへ。グラシユは見たところMIZ UKI社の飛燕四型かな。白に赤のラインが可愛らしい。オールラウンダー用のグラシユで、かなり使い易いモデル。二型を俺も昔使ってた（今ではサイズが小さくなって履けなくなったから大切に保管してる）。

今俺が使ってるのはINVADE社のG・e Boi g（ゲイボルグ）。色は青メインで白のライン。バルムンクほどスピード特化ではないが、スピード向きのグラシユで、なおかつバランスの幅がオールラウンダー並の自由度の高さを持つグラシユだ。これを加速と最高速度に極振りしてやれば、バルムンクをも超えるスピード特化のグラシユの出来上がり。最初は振り回されたけど、今ではもう使いこなした。

「ふう……………」

俺はスタートの構えをとり、意識を集中させた。

side 明日香

(……………スゴい、さつきまでとは別人みたいです)

隣で天野さんが構えてからというものの、微動だにしません。意識を集中してるんだと思います。私もそれに習って構えて集中します。

(天野さんはスピーダー……………ファーストブイは確実に負けます。なら、すぐにセカンドラインにショートカットしてバチバチします!)

そして頭の中でスタート後のシミュレーション。1回戦の天野さんの試合(対ニュージーランド)では相手のファイターの選手を終始置き去りにして30-0という大差での勝利をしてました。けど、速度だけならそのファイターの人より私の方が速いです。なら、置き去りにされる心配はないです!晶也さんの指示でもそう言ってましたし。

「Are you ready?」

「Yes」

「あ、はい!つとと、じゃなくて、いえす!」

「セット!」

ぷおおおおおおおん

もう聞き慣れたフォンの音とともに私は加速。すぐさまセカンドラインへショートカット

ブオン

「っ!？」

『速いぞ！急げ明日香！』

しようとしたところで私の左隣をものすごい風が吹き抜けました。一瞬何かわかりませんでした。晶也さんの指示で我に返り、私は理解しました。あれは空翔さんの急加速。確か加速に極振りしているから初速はほぼゼロでも最高速度までそんなに時間はかからない……このままだと置いていかれますっ！

「あああ!!」

私は気合を入れると同時に晶也さんに教わったメンブレンのショートカットによる加速、ソニックブーストで一気に私の出せる最大速度まで加速しサードバイに突撃するくらいの勢いでセカンドラインギリギリへ。対する天野さんはもうセカンドバイをタッチして、セカンドラインの半分手前くらい。ものすごい速さです。そのせいもあって、本来なら円を描く軌道で飛んで速度を維持するんですけど、今の私は最高速度で天野さんはもうセカンドラインの中央付近。円を描くような余裕は皆無です。なら、取れ

る手は1つです!

「んううう!!!」

私は足を揃えて身を丸め、体の前後を反転させます。そしてメンブレンを足裏に集中させて空を蹴る、私の得意中の得意技エアキックターン。天野さんは真つ直ぐ飛んできませんから、そのルートと軸は合わせたので、このまま突撃すれば止められます!

「やああ!!」

そして私はこちらに真つ直ぐ突つ込んでくる天野さんへ向けて手を伸ばして攻撃………しましたが、軸をずらさずにバレルロールだけで避けられてしまいました。そしてそのままサードブイをタツチしてサードラインへ。

ただ速いだけじゃなく、上手い………スゴく巧いです!

「燃えてきました!負けませんよっ!」

私は再びターンしてサードラインへショートカットしていききました。

油断していた訳じゃないですけど、気合を入れ直さないとですね!

## 第2話 驚いた……………

side 龍月

—— 同時刻。大会本部屋上

「少し遅れてしまったかな」

丁度さつき、俺の試合も終了。世界大会2回戦が弟子の試合と数分ほど重なってしまい、少々強引な試合になってしまったけど、間に合ってよかったよ。

……………対戦相手には少し申し訳なかったかな。セカンドラインのドッグファイトで開始5分で25対0に追い込んで向こうが降参、だしな。

で、試合を終わらせた俺は弟子の試合が天野空翔よく見える大会本部屋上のドアを開けて屋上に出る。

「やあ、遅かったじゃないか」

そこで腕を組んでフェンスにもたれ掛かり、試合を見ている人影が1つ。プロ復帰後のブランクを払拭する為に俺の作ったプランで練習している幼馴染の各務葵。確か久奈浜では空翔の対戦相手の倉科明日香を教えていた、んだったな。

ちなみに練習していると言ってもイギリスに来てしてる訳では無く、日本でしてる。



通信で。

「そう言うな。これでも急いで終わらせてきたんだぞ。勘弁してくれ。と言うか葵も来ていたんだな？」

「まあな。さすがに日本代表という訳には行かなかったが、そのスタッフにはなれた。1回戦負けだがな。お前の方は順調そうだな。ええ？世界大会8連覇のイギリス代表、神代龍月」

なるほど。ほかの選手の試合を見て自身にフィードバックしようとしたのかな。

「……………そんなことより、試合は？」

「さっき始まったばかりだよ。ちようどこれからつてところだよ」

「ほう……………なるほど。様子見つてところか。空翔のヤツ、全力は出てないな」  
後半の独り言は葵には届かなかったみたいだ。

side out

## side イリーナ

明日香と空翔の試合が始まってもうすぐ3分程。点差は12対8で4点差。試合は一方的とは言わない迄も、圧倒的な展開を見せているわね。空翔が圧倒的な最高速度のみで明日香を翻弄してブイタッチをメインにポイントを取る、明日香がショートカットしてドッグファイトに持ち込もうとして、あしらわれて逃げられる。この繰り返し。何とか点数は取ってるようだけど、このままだとジリ貧ね。

「相手の天野空翔？すごく強いじゃない。沙希を倒した明日香がああも圧倒されてる」「速度加速度共にスピーダーとして理想系と言ってもいいですね。流石、元とはいえスピーダーの伝説、神代龍月選手のお弟子さんですね」

「私達とは別の世界の住人って感じのする選手です。でも、明日香さんもよくあれについていけてますよね」

同じスピーダーの莉佳と真白、もし当たったとすればアレを止めてドッグファイトだけで点を取っていかないといけないファイターのみさきには空翔が（真白の言うように）別世界の人間に見えるみたいね。一応空翔もジュニアでは師匠の神代龍月さんみたいに8連覇とは言わないでも、ここで優勝すれば空翔は3連覇。師匠の元スピーダーとしての姿の方ばかり目立ちすぎて日本ではたまに神代龍月の弟子、程度しか取り上げら

れないけど、スピーダーの中のスピーダーを体現してるのよね。しかもそれで十分すぎる結果も残してる。

それに最初は翻弄され続けていたとは言っても少しずつただけど着いていけるようになって行ってる明日香も凄いわよ。けど……

「でも、コレだと明日香は勝ち目ない」

「そうね。何とかあの速度に慣れて着いて行ってるようだけど、このままだとジリ貧。けどそれ以上に……」

正直言いたくはない。世界大会に向けて一緒に練習した明日香に間接的にはいえこんなことは言いたくない。

「空翔、全力じゃない」

「やっぱり沙希もわかる？彼、最高速度しか本気を出してない。言ってみれば本気だけで全力じゃないってところよ」

「「え」……………」

やっぱり固まったわね。

「確かにあのスタイルはスピーダーとしての理想系。でも、逆を言えばそれだけしかしてない」

「それだけで世界は取れないわよ。現に明日香もそれに慣れて少しずつ点差を伸ばして

るでしょ？まあ、並の選手だとその最高速度だけで手も足も出ないところでしようけど。スピードダーの理想系ってことは、それはつまり誰もが知っている戦い方ってこと。強い選手は皆、何かしらのオンリーワンを持つてるわ。空翔が最高速度しか見せていないのは、つまりその他にオンリーワンが隠されているからよ」

「じゃあ、なんでそんな手抜きを……………」

沙希で言う所のバードケージ、明日香のペンタグラムフォース、みさきの背面飛行、日向晶也の元祖ソニックブースト。それらに代表されるようなオンリーワンを空翔は何も見せてない、それは私にもすぐわかった。けど、かと言って莉佳の言うように手抜きって訳じゃないわね。最高速度は本気を見せてるわけだから。

「手抜きじゃないわよ。言っただでしょ？最高速度は本気だつて。おそらく様子見。明日香のことをじっくり観察してるってところね」

「だと思ふ。私と初めて試合した時もそうだったし、そもそも師匠からどんな相手にも手加減はするな、手加減は失礼に当たるって教わってきてるから。だから、もし最高速度以外を引き出したら……………明日香は認められたってことになる」

「認められた？」

「何にですか？」

私が何度も何度も沙希をけしかけて、何度目かでやっと引き出したら空翔の本気。そ

の沙希に勝利した明日香ならあるいは……  
「好敵手ライバルよ」

side out

side 明日香

天野さん、速すぎてなかなか捕まりません……あれ以降なんとか数度ドッグフアイトに持ち込んで点は稼いでるんですけど、天野さんはそれ以上にブイタツチで得点を重ねてます。それに、何点かはドッグフアイトで私が点を取られたりもしてます。単純なスピードだけなら沙希ちゃん以上かもしれないですね。でも、私だってただやられていたわけじゃないんです！最初は捉えきれなかったあのスピードにだってもう着いていきます。さすがにスピード勝負になったらそもそもそのスペック差で負けてしまいますけどね。

見たところ天野さんもバランサーはオフ。けど、晶也さんも言っていましたけど、バランサーオフの慣れ、その一点だけは私でも勝ち目はあります！

「やああ!!」

私を振り切つてサードブイをタッチし、サードラインへ突入した天野さんの進行方向を読んで、突破された時にはソニックブーストで加速してショートカット。最初は距離が空いたので避けられましたけど、至近距離でターンすれば！

「うわっ!!」

「まだですっ!」

読み通りです！至近距離でのエアキックターンから体当たり気味に無理矢理天野さんを弾き飛ばし、すかさず再度エアキックターンで背中へタッチしてブイの遙か上方へとさらに弾き飛ばします。そしてまたエアキックターンで今度はフォースブイへ加速してブイタッチ。一気に2点も獲得しました！このままファーストブイまでソニックブーストで加速して更に点差を縮めます！弾き飛ばしたのが上なので、ローヨーヨーの要領で加速されてしまいます。けど、天野さんはおそらく初速は限りなくゼロに近いです。晶也さん曰くそれらを考慮したら天野さんの加速力なら初速から最高速度まで3秒くらいのはず！それならファーストブイはギリギリ

「ギリギリブイタッチ出来る」

「……………え？」

「なるほど、悪くない作戦だ」

「きやああっ!!」

フォースラインの半分ほど通過した時、不意に私の上から声がし、影がさしました。有り得ないと思いつつも、それに気付いて背中をやられまいと咄嗟に振り向こうとした瞬間、私の体に強い衝撃が走り、真下へ弾き飛ばされました。

「っ……………っ!?!」

不意打ち気味に受けた攻撃でしたが、なんとか体勢を立て直して上を向いた瞬間、もう目の前には天野さんがほとんどゼロ距離にいて攻撃態勢。防御も回避も間に合わないまま再び攻撃を受け、私は海へと落とされました。

s i d e o u t

「明日香あーっ!!」

突如としてスタイルが変わったかのような相手の天野空翔選手からの攻撃に、海に叩き落とされた明日香の名前を叫びつつ、今の状況を冷静に分析。けど、考えても考えても出てくる答えは1つ。『有り得ない』

試合開始直後の初動、あれを見る限り初速はほとんど0に近いはず。グラシユの基本的なパラメータの初速、加速、最高速度をそれぞれ10段階で評価するならば天野空翔選手はざっと1・10・10。あそこで明日香に弾かれて、そこから体勢を立て直して加速しても明日香に追い付くのはファーストブイの手前あたり……それなら攻撃を仕掛けるのはブイとの間に相手を挟む危険があるから普通はしないし、公式ルールでは違反となる。つまり、明日香がファーストブイをタッチできることは确实。それこそ1秒以内に最高速度まで行くでもない限り危なくて狙えない。

そのはずだった

それが実際はフォースラインの半分程のところまで追い付き、明日香を海へと叩き落としました。遠くから見ていたからわかることだけど、天野選手の速度が上がった訳では無い。急接近した時の速度は今までと同じくらいだった。そう考えると自ずと結論は見えてくる。



『ワクワクしてきました!!』

考え込む一方、水しぶきの中から一筋のピンクの光の塊のようなものが飛び上がる。明日香だ。

『まだあんな隠し球があつたんですね! 晶也さん、指示をお願いします!』

良かった。ただでさえ太刀打ちするのがやつとなどところに見せられた隠し球で諦めたんじゃないかとすら思えた瞬間、明日香は諦めるどころかむしろ闘志を燃やしていた。そうだ、明日香はこういう子だった。相手がどんな強者でもぶつかって行く、強ければ強いほど燃え上がる!

「わかった、とりあえず追い付くまでショットカットを続けてくれ。進路を塞いで止めることを第一に考えること。それとさっきの推測だけど、エアキックターンのメンブレインコントロールとソニックブーストのメンブレインショットカットによる加速の複合技のようなものだと思う。初速から最高速度までの時間を短縮しているんだ。恐らく1秒もかからないはず……」

『そんなすごいことが出来る選手が世界にはいるんですね! 燃えてきました!』

落とされてから今までに天野選手の得点は14に増えて再び4点差。今はセカンドラインを飛んでいる。この際だ、追いかけて止めることを最優先にして行くしかないな。

s i d e      イリーナ

「あ、あれは……………空翔の得意技の……………」

「うん。イチゼロアクシヨンとメテオフォル」

明日香が空翔を止めてブイタッチを決め、あわや2連続でブイを取れると思った瞬間。空翔が繰り出した2つの技。

「今、何が起こったの……………」

「……………イリーナ。教えてあげて。私も理論とかはよくわからないから」

沙希に諭されて、今の空翔のプレーを見て呆然とする3人に向き直る。

「まず、前提として空翔のグラシユは初速を極限まで抑えて加速と最高速度に極振りしてる。そこは良いわね？」

「もちろんです」

「で、そんな加速最高速度に極振りしていても、初速はほぼ0に近い。そんな状態から最高速度まではローヨーヨーで加速しても約3秒程掛かるのよ」

それでも十分に速いのだけね。空翔はそこでは止まらなかつたのよね。

「最初に使った技、イチゼロアクションはその3秒の加速時間をほぼ0に……確か0.5秒つて言つてたわね。そこまで短縮する技ね。やったことは簡単に言えばエアキックターンとソニックブーストの複合技。足裏に集めたメンブレンを蹴ると同時にメンブレンシヨートカットを行つて爆発的な加速をするの」

「例えるのなら私達の普通のスタートが水泳の飛び込み、空翔のイチゼロアクションは陸上のクラウチングスタート。ただ、これの怖いところは加速だけでなく減速も出来るところ。瞬時に止まることも可能にしてる」

沙希もそれをやろうとした時期があつたのだけれど、結局バランス外してもできなくて断念したのよね。

「2つ目は単純でスイシーダの発展技、メテオフォール。空翔は流星落として言つてたけど、イギリスだと通じなくてメテオフォールになつてるわ。やつてることも単純でどついて落とす。それを海面に落ちるまで繰り返す。それだけよ」

正確には、2度目以降の攻撃は相手が絶対に回避できない体勢を立て直した瞬間を狙つたりしてるけど、そこまではいいわね。

「どれもスピーダーとして勝つ為につて空翔が編み出した……メテオフォールは神代さんの受け売りですが……技よ。あとはもう一つ。見たただけだと分かりにくいかもしれないけど、もう使つてははずよ」

空翔自身の初速の遅さをカバーするイチゼロアクション、ドッグファイトに持ち込まれた時にあしらう為のメテオ流星落フォールとし、それと進行方向を塞がれた時に空翔の使う技がもう一つ。

「明日香がショートカットした後の動き、よく見てて。どうなつてるかわかる?」

「ま、全く何も無い別の場所を攻撃して抜かれてる……もしかしてこれ!」

さつきから明日香は空翔の前にショートカット、そこから空翔がどの方向に避けるか見切つてから攻撃をしてる。けど、その攻撃は全部空を切り、右へ攻撃すれば左から抜かれ、上を攻撃すれば下に抜かれ、を繰り返していて全く触れられなくなつてる。

「そうね。あれはミラーージュ。莉佳や真白もよくやるシザースを発展させたものよ」

「え?でも天野さん、直進するだけで左右の動きは抜く時にしか……」

「してる。その抜く時に一瞬だけ」

これは確かラグビーやアメフトの技術だったかしら?抜く瞬間に抜く方向に一瞬だけ体を向けて、相手が釣られたところでそのままの体勢で逆方向へ抜く。空翔自身の速度と時織りませるイチゼロアクションのせいで、相手からは幻覚を見るような錯覚が

する、と言われてミラーージュといえ名前がついた……と聞いたことがあるわね。

本人曰く何度も左右に動いていれば相手に警戒されるし、どうしても最高速度は落とさざるを得ない。なら、フェイントを入れるのは抜く直前だけでいいんじゃないかと。

ここまで手の内を見せてきた……つまり明日香は好敵手つて認めてもらったつてことね。初戦でここまでするんだもの、さすがとしか言えないわよ。

「これが現世界ナンバーワンスカイウオーカー、神代龍月師匠の一番弟子、プロに最も近い日本人学生『流星』天野空翔よ」

side out

side 明日香

たぶん様子見を辞めて本気で来たんだと思います。あの不意の加速と海に叩き落とされてからというもの、私は天野さんに全く触れることさえ出来なくなっていました。

真つ直ぐ突つ込んできて、私から見て右に進行方向を変えてきた、と思つてそつちへ攻撃しようとするれば天野さんの影がすうっときえるかのような幻覚を覚えて逆から抜かれています。なら見えた方向と逆に攻撃すれば……と試してみただけです、その時は影は消えることなくそのまま私を抜き去る、と言つた感じですが。一体何がどうなつているのか私には全く理解が追いつかない状態なのですけど、不思議と私の中の闘志はどんどん燃え上がっていく一方です。

さつき天野さんが20点目のブイタッチをした少し前に晶也さんから残り30秒を切つた、と言われました(自分から聞きました)。ほぼずつとソニックブーストを乱打しての全速力で飛び続けて、しかもあつちへこつちへと翻弄されていたので疲労は随分前に限界を超えています。正直今にも意識が途切れてしまいそうで怖いですが、でも、なんとか……同じ『負ける』という結果だとしても一矢報いて負けたい。その思いだけが今の私を突き動かしている、そう思います。

『残り時間から見ても次がラストチャンスだ。絶対に止めるぞ、明日香!』  
「つ……………はいっ!」

具体的な指示がない、ということも晶也さんにも私が抜かれている手品のような技がなんなのかわかつていないんだと思います。正直私自身も全くわかりません。

朦朧とする意識の中で晶也さんにそれを悟られないよう返事をしてもう何度目かも

わからないソニックブーストを掛けてファーストラインヘショートカットしました。

「あ……………」

そこで突如、一瞬だけ立ち眩みのようなものがし、ファーストライン上で失速。そこから先は……………ほとんど覚えてません。覚えていることといえば、なんとか加速しないと身を屈めて加速したこと、海水の冷たい感触、私が得点した証の水色の三角。それだけでした。

s i d e      o u t

「驚いた……………」

俺は唾然としながら、お姫様抱つこの状態で意識を失って寝ている倉科明日香を抱えて海面ギリギリを飛んでいました。

最後の最後、この子は俺のイチゼロアクションに似た急加速で突っ込んできて、ミラージユで避けることも間に合わずに正面衝突。俺はメテオフオールで倉科明日香を海に再度叩き落として、あとはセカンドブイをタッチしたところで試合終了。

そのはずだった。

メテオフオールで叩き落としてセカンドブイへ向かおうと上昇と加速を始めた直後。不意に背中に悪寒を感じて見てみると、そこには右腕を振りかぶった倉科明日香。何で？今海面に叩き落としたはず………という疑問と、前髪で目元が見えなかったこともあって、俺は恐怖を感じ、同時に背中をタッチされると同時に試合終了のブザーが鳴り響いた。

何が起きたのかわからなかった。わかるのは俺のイチゼロは（不完全ながら）コピーされたこと、ミラージユとメテオフオールがかなり強引にしろ破られたという事実。あとは20―1―1で俺が大勝したこと。それだけだった。

後からセコンドから聞いた話だと、俺のメテオフオールの勢いを利用したコブラで反撃してきたらしい。きりもみ回転も加えて。

兎にも角にも俺はそれを潰えようと俺の後ろを飛んでいるはずの倉科明日香の方へ振り向く。が、その瞬間、彼女のグラシユから出ているピンクの翼が霧散し、彼女は海へ向けて落下を始めた。



「ヤバいだろっ!」

彼女の意識がない、俺はそう判断してイチゼロを使って加速。何とか海面ギリギリで捕まえることに成功した。飛燕四型が機能を失っていてくれたことに感謝だな。

「Medic!! Hurry up!!」

救急医を呼びつつ、そのまま俺は波打ち際に着地。

初めてそこで倉科明日香の顔をまじまじと見てしまい、こんな可愛い子があんなに凄いいプレーをしたんだな、とか考えているとこの子のセコンドの人と担架を担いだ救急医数名が到着。彼女を担架に乗せて、あとはセコンドの人や日本代表関係者に任せた。俺も後で見舞いに行っておこうかな。

その日の夕方、落ち着いてから見舞いに行った時は何故か物凄く感謝された。曰く、凄いい人と試合出来て良かった、楽しかった、と。最後に意識を失ったのもそのせいでペース配分を無視したから……らしい。神代龍月師匠が来た時なんかは明日香ちゃんもセコンドの日向晶也（まさかあの時の彼がいるとは夢にも思ってた）も驚きと大興奮。サインを強請ってすらいた。曰く、日向晶也は昔から、明日香ちゃんはFCに初めて触れてから存在を知り、試合動画を漁るうちにファンになったらしい。

しかも大会最後のプロ優勝とジュニア優勝者のエキシビジョンマッチ、それぞれの優勝が師匠と俺なら俺が明日香ちゃんと代わる約束までこじつけた。どの道俺が優勝し

たらエキシビションマッチは辞退するつもりだったから、まあいいか。

その後の世界大会は俺が危なげもなく3連覇を達成。エキシビションマッチは約束通り明日香ちゃんを推薦した上で辞退。明日香ちゃんと師匠は終始セカンドラインでドッグファイトを繰り広げ、20―0で師匠が大勝していた。ちなみにその後、大勢の人が見ている前で明日香ちゃんのグラシユにサインをしてあげていた。

そんなことがあったのが去年の10月。次の世界大会まで会うことは無いだろうと思っていた彼女らとあんな形で再会するとは、この時の俺は夢にも思っていなかった。

## 第3話

## 煉獄………完食???

——世界大会から約半年後 3月末

「………なんでこうなつたんだろうな?」

今俺は飛行機のファーストクラスに乗ってる。師匠のツテで乗ってるんだけど、俺みたいな一庶民が乗って良いんだろうか? 調べてくらい豪華で快適。

………そんなことはどうでもいい。この飛行機、行き先は日本の鳴田国際空港。そう、今の俺は帰国している真つ最中つてわけ。ここ5年近くずっとイギリスで空を飛んできた俺がなんでこんなことになったかと言うと、それは数日前に溯る。

——数日前

「んん……………」

朝、自室で目を覚まし、時計を見ると7時を少しすぎたくらいだった。今年の分のハイスクールはもう終わっているなので今日は休日。寝間着から着替えて自室から出る。

「おはようございませう」

朝の挨拶をしながらリビングに入るが、返事はない。代わりにソファに座ってスマホで電話していた神代龍月師匠が口元に人差し指を当てて「静かに」のジェスチャー。普段より真面目な口調だし、大事な電話なのかな？日本語で話してるあたり相手は日本の誰か？

見たところ朝食は師匠もまだみたいだったので、とりあえず2人分用の調理を始める。と言っても夜の内に作ったポタージュを温めつつ、コーヒーマイカーにろ過紙を張って（師匠が挽いた）コーヒード豆を入れてからお水をポットに入れる。クロワッサンは数個オープンに放り込んで、チーズを入れたスクランブルエッグとベーコンを焼く。あとは生野菜を少し盛り付け。

師匠と暮らし始める前も、今は亡き両親は仕事で忙しくしていて家を空けることも多かつたし、今にしても師匠が家を空けることもそこそこにあるので家事はそこそこなせるようになってる。余談だけど、イギリスではあるけど洗濯とかはガッツリ日本式で外に干してる。こっちだと乾燥機を使うことがほとんどらしいけど、日本人の魂が天日

で干したがつてる。市街にある集合住宅とかだと難しいけど、ここは郊外で師匠が買ったそこそこ広い敷地で庭付きの邸宅。外に物干し竿使つて干しても誰の迷惑にもならないからね。

### 閑話休題

朝食の用意が出来てテーブルに運んでいると、丁度電話が終わった師匠も電話が終わったみたいでテーブルにつく。

「おはよう。悪いな、手伝えなくて」

「おはようございます、師匠。大して手間をかけた訳でもないんで大丈夫ですよ。大事な電話だったんですか？」

「ま、そんなとこだ。いただきます」

「いただきます」

ちなみにこんな邸宅に住んでも家政婦とかその類は雇ってない。師匠曰く自分でやりたいから、とかなんとか。さすがに家を空ける時とかは掃除とか庭の管理とかを日雇いで任せることはあるけどね。豪邸って訳でもないから広さもたかが知れてるし、休日の暇な時にせこせこやってたら終わるしね。建物の方もごく一般的な大ききの平面の建屋だから日々コツコツとやってたらそこまで苦でもない。

「で、さっきの電話だが」

「ん……っ。はい」

ある程度食べ進めたところで師匠から話を持ちかけてくる。とりあえず口の中にあったものを飲み込んでコーヒーを一口。

「日本行きが決まった。4月からは日本で暮らす」

「んぐう!?!ゲホツゲホツ」

危ない危ない。もう少しで師匠に向けてコーヒーを吹き出すところだった。おかげで気管に少し流れ込んで蒸せたけど。

「大丈夫か?」

「ケホツケホツ……ふう。驚いただけなんで、なんとか。にしても急つすね?」

「理由は幾つかあるが……とりあえず久奈浜学院に転入してくれ。必要な書類は現地の人から受け取れるよう手配してある」

「………はあ!?!」

——再び現在

とまあ、そんなこんなで今日日本に着いたところだ。日本時間で夕方6時前ってところか。

数日しか準備期間がなかったのもあって、とりあえず最低限の日用品とフライングサーカス用具一式しか持ち出せなかった。その他大荷物は一昨日空輸して四島の師匠が昔住んでいた家に送ってある。着替えは現地調達でいいや的なノリで。

ちなみに師匠本人はもう少しイギリスで用があるとかで、数日遅れて来日するみたい。

「……………現地案内の人と合流するのは明日、ホテルをチェックアウトする時……………だっ  
たか?とりあえずホテル向かうか」

「それには及びません。もう着いてますから」

「どわあ!」

手荷物を受け取り、空港のロビーに出たところでスマホのメモ帳に書いておいた予定表を確認。そこに不意に背後から声が掛かる。

びつくりしたあ……………ん?今の声って

「もしかして……………もしかしなくてもリーナちゃん?」

「リーナです。何度も言ってますが、その子供っぽい呼び方はやめてください」

「リーナちゃんはリーナちゃんだろ？」

「はあ……………全くもう」

そこに居たのは以前俺と一緒に師匠の元でフライングサーカスをしていた妹弟子、沙希ちゃん乾沙希の友達のリリーナ・アウアロンアウアロン。黒の長ズボンに白の長袖のシャツ、その上からズボンと同じ素材の上着を着ている。薄黄緑の髪は頭の左側でサイドテールにまとめている。

イギリスにいた頃からだけど、リーナちゃんは黒メインでコーデすることが多い。明るい色の服が似合わないわけではないんだけどね。あまり明るいのは落ち着かないらしい。気のせいじゃなければうっすらと化粧しているようにも見える。

「その服、大人っぽくてよく似合ってる。それにそのシユシユ、まだ使ってたんだ？」

「あ、えつと……………ありがとう？こ、これはせっかく空翔がプレゼントしてくれたものですから……………他に替えもありませんし、仕方なく。そう！仕方なくです！」

リーナちゃんの付けている黒のシユシユは3年前、リーナちゃん（と沙希ちゃん）に出会ってから最初のリーナちゃんの誕生日に俺からプレゼントした物（ちなみに師匠は今着ている服を贈っていた）で、それ以降ほぼ毎日着けてくれる。師匠の贈った服はそこそこいいお値段らしいけど、当時俺はあまりお金もなかったこともあって、贈ったシユシユはかなりの安物。仕方なく、と言うのなら買い換えれば良いのになくとは思



けど、触らぬ神に祟りなしとも言おうし、敢えて触れないでおく。

「……………コホン。それはとりあえず置いておくとして、アレはどうします?」  
「ん?……………あー、アレか」

リーナちゃんも咳払いを1つ入れて落ち着いてから、空港のエントランスの方へ視線を送る。俺もそれを追って見てみると、恐らくアレは……………マスコミだな。アヴァロン社の関係者らしきSPっぽい人のバリケードでここまでは来ないけど、かなりの人数がいる。

こつち来る時にイギリスの空港でも捕まったし。ま、世界大会8連覇の神代龍月の弟子たる俺が帰国するってことは師匠本人も帰国するってのとほぼ同義。どこから聞き付けたのかは知らないけど、商魂たくましいことだ。明日の朝のニュースと新聞は大騒ぎだな。

「無視するわけにもいかないだろ? 軽く答えてから帰ってもらうさ。とりあえず荷物頼める? グラシユ以外はそんな重くないはずだから」

「空翔ならそういうと思っていたので大丈夫ですよ」

俺が何かしてもアクション何も無いのに、師匠が何かするとすぐこれだ。別にそれに嫉妬したりはしないけど、すごいなあ、とくらいは思う。イギリスのマスコミもそうだったけど、恐らく今日師匠も帰ってくると踏んで待機してたんだろうな。

とりあえず30分ほどマスクミの相手をして「長旅で疲れてるから」と理由をつけてホテルへ退散することにする。

「そう言えば、師匠から現地の案内の人は明日合流って聞いてただけど……一応それってリーナちゃんの間違いないよな？ 沙希1人にして大丈夫なのか？」

「ええ。私で間違いないですよ。明日の朝でも良かったんですけど、夜間バスは少し抵抗があったので。早めにホテルにでも入って明日合流なら、今日でも同じことでしょうか？ ちなみに沙希は倉科明日香さんのところに泊まりに行ってるので安心してください」

まあ、確かにそれなら早いか遅いかの違いしかないか。ま、もう今の俺にとつて日本はあまり縁のない国だし、そういう所に1人でいるより気心知れた友達がいてくれた方が助かるけどな。リーナちゃんにしても沙希ちゃんの場合は特に気兼ねしないし。

「この後の予定はどうしますか？ 先にホテルのチェックインだけ済ませておきますか？」

「そうだなー。そこまで量はないけどグラシユ持ち歩くのはかさばるし。その後は……そうだな。テキトーに着替えの服買って飯かな？」

「ああ、服でしたら私が事前に買っておきました。空翔のことですから、どうせ着替えは現地調達と言うだろうとあたりは付けてましたから。好みもバッチリ把握してますから安心してください。食事は……候補に何店舗か挙げてますから一緒に決めましょ

う

いや、リーナちゃん怖いわ。実際そう考えてたし助かるけどさ。ホテルに入ってから買ってもらった服を見ても本当に俺の好み通りの服だったしサイズもピッタリだったから嬉しいんだけどね？服代払おうと思ったら師匠から軍資金貰ってるって言ってるからそこは安心。

というかリーナちゃんの取った部屋、シレッと俺の隣にしているのな。別に迷惑って訳でもないし、リーナちゃんみたく可愛い子に構ってもらえるのは悪い気しないから別にいいんだけどね。

とりあえず日本着いたことの報告と、リーナちゃんが来ることを教えてくれなかったことこの文句をニヤインで送信。え？軍資金は渡してない？………：晩ご飯はなにか奢ろう。

晩ご飯はリーナちゃんの希望もあつて（回らない方の）お寿司になった。もちろん俺の奢り。一応それくらいのお金とクレカは持つてる。四島の方はこの手の店は意外と少ないらしいし、リーナちゃんみたく海外出身者だとお寿司とか天ぷらとかは日本食の定番なんだろうな。お店入った瞬間さつき空港で取材された映像が『FCトッププロ、ついに帰国か!』の見出しでニュース速報が流れてたのは物凄く恥ずかしかったけどな。つかマスコミ仕事早いな!おかげでサイン強請られたけど、サービスしてもらえた

し良しとしておこう。お寿司美味しかったしな。

その後は俺の部屋で昔話や近況報告みたいなとめどない話に花を咲かせて、気が付いたら0時前。少し眠そうにしていたリーナちゃんもとうとう電池が切れたように寝てしまった、俺の部屋で。リーナちゃんの部屋は当然ロックがかかって、さすがにリーナちゃんの着てる部屋着からカードキーを漁ったりする訳にはいかなかったから、俺の部屋のベッドに寝かせた。翌朝顔を真っ赤にして必死に謝まれたけど、別に怒るようなことでもないし、軽く流しておく。ま、そこそこ親しいと言っても異性の部屋で、無防備に寝顔晒してたって思ったらリーナちゃん的にはすごく恥ずかしいことなんだろうしな。大丈夫、間違いは起こしてないから。

ちなみに俺はベッドを背もたれにして床に座って寝た。流石にイスは寝るには硬かったからね。

翌日は飛行機の国内線と電車、最後に船で四島へ向かった。特に急ぐ旅でもないの  
で、電車をあえて遅らせてリーナちゃん散策してみたり、食事したりと色々楽しんだ。  
あと船乗る前に日常生活用のグラシユを購入（リーナちゃんが何故か目をキラキラさせ  
ながら選んでた）し、四島行きの船に乗る。

四島は飛行可能な特区として認められてるらしく、日常生活でもみんな飛びまくって  
るみたい。イギリスにもそういう場所はあるにはあるけど、俺の住んでた所の近くには

なかった。くそお………もつと早くここに住みたかった。

軽い世間話をしながら飛ぶこと10数分。

「ああ、空翔の荷物ですけど、もう届いていたので家に入れておきました。ある程度の片付けもしてあるので後で確認しておいて下さい」

リーナちゃんの仕事が早過ぎて怖いんだが？いや、ありがたいんだけどな。

「ちなみに空翔がこれから住むことになる神代さんの旧家、私も空翔の荷物受け取る時に知ったんですけど、あの子のお隣なんですよ」

「………あの子？」

俺が知ってる人でもいるんだろうか？四島に親しい人はいないはずなんだが

「覚えてませんか？去年の世界大会2回戦で空翔と戦った子です。倉科明日香」

「ああ、あの子か」

いた。いや、忘れてた訳じゃないんだが、親しいって程じゃないし、まさかこういう偶然があるなんて思わないだろう？

「ちなみに沙希にも空翔が来ることは伝えてません。その方が面白いでしょう？」

「沙希ちゃんの場合、俺が来ることより師匠が来ることの方が喜びそうだけだな。師匠のこの尊敬通り越して崇拜くらい行ってるんじゃないか？」

「沙希ですからね、あると思いますよ」

その後、リーナちゃんの沙希迎えついでに倉科家に挨拶を………と思っただけで、両親不在。夜には帰るって言うてたし、何か持って挨拶しないと。確か日本では引越して蕎麦だっけ？を渡す風潮があるのかなとか………イギリスからの引越して蕎麦つてのも変だから何かお茶菓子的なものでも作ろうか、マカロンとか。アップルパイとか手間かかるから片付け片手間は難しいし。

両親は不在だったけど、明日香ちゃんと沙希ちゃんとはちゃんとした。リーナちゃんの俺のことを話してないってのは本当だったみたいで、沙希ちゃんも明日香ちゃんも俺の顔を見て驚いてた。明日香ちゃんはさっきの俺と同じ理由で、沙希ちゃんはそれプラスで俺が帰国したってことは師匠も？みたいな感じで。片付けもあるからとりあえず少し話すだけにしておいて、この日は解散。俺も家に入る。

「……………ある程度、とは」

リーナちゃん、片付けある程度したとは言ってたけど、ほぼ終わってね？流石に私物関連とかは残ってたけど、それ以外はほとんど良い感じに仕舞われてたし、レイアウトも良い感じ。リーナちゃんって何かとこう気が利くんだよな。将来いいお嫁さんになりそうだ。旦那さんになる人は幸せ者だな。

おかげでやるのが最低限すぎて、暇だなくとか、晩ご飯どうするかなくとか考えながらひたすらマカロン作ってた……………ら作りすぎた。ざっと100個くらい。さすが

にこれ全部明日香ちゃんここにプレゼントってわけにやいかんでしょ? どうしよう  
………

「少し早いけど、晩ご飯の店探しがてら考えるか。一人分だけ作るの意外と面倒だし、あ、ついでに白瀬さんとこ顔出しとこうか」

というわけでマカロン30個くらいずつ3袋に分けて入れてから、1袋だけ持って外へ。そのまま停留所から繁華街へ向けて飛び立つ。

白瀬さんは師匠の幼なじみで、スカイスーツ白瀬ってお店をやってる人。半年前の世界大会も日本代表の明日香ちゃんの付き添いで来てたらしい。俺も師匠繋がりで少しだけ付き合いがある。今日は挨拶だけのつもりだったから、挨拶は軽く済ませてマカロンをプレゼント。初めて会った白瀬さんの妹のみなもちゃんも、最初は白瀬さんの後ろに隠れてた(人見知りか激しいらしい)けど、マカロン1つあげたらすぐく美味しそうに食べてくれた。ここ来る度に作ってこようかな?

というやり取りをスカイスーツ白瀬でしたのが10分ほど前。今は晩ご飯を求めて空を飛んでるところ。白瀬さんとみなもちゃんオスメのアゴ出汁うどんが美味しいお店を探してる。一応今後お世話になるかもしれないし、例のマカロンを家に寄って1袋持ってきたし。

「白瀬さんの話だと確かこの辺………ましろうどん………ああ、あれだ」

スマホの地図を頼りに探していると、ましろうどん、の暖簾をさげた趣のあるお店を発見。この雰囲気、当たりの予感！

「ご飯時はすごく混むって言うってたけど、まだ少し早いし大丈夫だよな？」

俺は最寄りの停留所に降りてお店に向かう。やっぱりこの手のお店って雰囲気あるよね。チェーン店とかだとそうでもないけど、初めてだとなかなか入りにくい感じ。お店の人は朗らかで優しいし初見さんウエルカムって言うってたから大丈夫だと思うけどな。

「こんにちわ〜…」

「あ、いらつしやいませ〜」

とはいえやっぱり初めて入るお店は緊張するもの。おっかなびつくりと戸を開けて中に入ると、エプロンをした若い女の人が声をかけてくれた。20代半ばくらいか？かなり若い。

「ご飯時を外したかいあって、客は数人のみ。とりあえず手近な机に座ってメニューの冊子を開く。おおー、すごい品揃え。これは期待できそう。なら、最初に頼むのも決まりだな。

「いらつしやいませ、ご注文はお決まりですか？」

「かけをお願いします。並盛で」



「はぁーい。かけーつ入りまーす」

定番中の定番、かけうどん。ざるやぶっかけ系も良いけど、基本はこれだよな。大抵のうどんはここから派生するから、かけの味がお店の味って言っても過言ではない（持論）。

結論から言おう。俺はこの店の虜になった。一口目を嚙った瞬間体に走った衝撃、そこまで奇をてらったものではない。ごく普通のかけうどん。強いていえば出汁がアゴ出汁で、かつおとか昆布より少し癖があるかな？程度の違いだけど、このうどんには言葉では表せない何かがあった。

それから都合3杯。山菜、月見、あと少し趣を変えて山かけぶっかけ。どれも美味しい。次は何にしようかな

「あらあら。よく食べるのね？若いっていいわね」

5杯目を何にしようかとメニューを見てみると先程の店員のお姉さんがこちらに声をかけてくる。まあ、ここまで食べまくる客は滅多に來ないんだろうな。俺の場合、師匠が作り過ぎた時の量が物凄くて、これくらいならペロツと行けるって程度なんだけど。フライングサーカスでよく体動かしてるからってのもあるけど。

でも、今日はまだ運動してないから食べ終わったら少し練習するかな。

「何言ってるんですか？お姉さんだってまだまだ若いでしょうっ？」

「あらあらまあまあ」

あれ？周りの人が一齐にお茶吹いたり蒸せたりしてる。何があった？

「嬉しいこと言ってくれるわね。お世辞でも嬉しいわ。これでも、あなたより1つ年下の娘がいるのよ？」

お世辞じゃないんだけどなあ……え？子持ち？しかも俺の1つ年下!?てことは単純計算で若く見積つても30半ば!?女子大生って言われたら信じてしまいそうなくらいのこのお姉さんが!?

「えっと……冗談……とかではなさそうですね。どう見ても20代にしか見えないですけど」

「嘘じゃないわよ?口が上手いあなたには次の1杯サービスしちやおうかしら?」

「本当ですか!?あ、ならそのお礼代わりと言つても何ですけど、俺が作ったマカロン差し上げます」

これ目当てで言つたわけじゃなくて紛れもない本心だった、とだけ付け加えておく。だつて本当に見た目若いもん。

じゃあ、さつきから名前が気になり過ぎているアレ、頼んでみるか。ついでにマカロンを1袋渡しておく。

「じゃあ、この1つだけ異様な雰囲気漂わせてる煉獄味噌煮込みうどんを。辛さは

………手始めに2で」

「「?!」」

「はあ〜い。煉獄2番で入りまーす」

あれ?なんか周りの客が顔引き攣らせて急いで食べ始めた。あ、次々に会計始めた。ちやつかり完食してるし。俺、なんかマズイことしたか?

その答えは数分後、煉獄味噌煮込みうどんが届いてわかった。唐辛子の匂いがきつい。唐辛子の鼻を刺すようなツンとする匂いが牡丹さん(他のお客さんがいなくなつたのもあつて煉獄待ちの間に名前を教えて貰った)がカウンターから持つてくる時点で既に俺のところまで匂つてきていたからな。そして丼の中を見ても赤い。とにかく赤い。マグマか?

この正統派のうどんのお店で何を間違えたらこれが出るんだろう?考えても仕方ないか。とりあえず、逝くか。

「ズズツ………かつら?!でも美味しい!」

麺を一啜りしてみても、まず思うのは辛い、これに尽きる。正直辛いものが苦手な人には無理だろうし、そうでなくてもこれを食べるのはキツイだろう。匂いもきついしな。

けど、食べ進めるとわかる。辛さの向こうにある旨みと風味。例えるならアレだ、本場四川料理の麻婆。アレも普通の中華店とかだと辛さを抑えてたり、激辛もただ辛いだ

けで美味しくないけど、上手い人が作れば激辛は激辛でもちゃんと旨味があつてそれが魅力になるやつ。この煉獄味噌煮込みうどんはその後者のパターンのようなのだ。食レポみたいな言い回しをしたら、この辛さが旨味を引き立ててる、とかか？とにかく旨辛い。味噌と唐辛子のかなり強い風味をアゴ出汁が上手くまろやかにしてる………：ようないがする。俺、そこまで味覚鋭くないし、それっぽく言ってみる。

「あらあら。うちの煉獄味噌煮込みをそんなに美味しそうに食べる人、空翔君が初めてよ?」

「この手のつて、麻婆とかもそうですけど下手な人が作ったら辛いだけなんですよね。けど、この煉獄味噌煮込みはちゃんと美味しいです。箸が止まらないですよ!」

「元々はネタで作ったメニューなんだけれどね。メニューに載せるからには美味しいものを、つてのがうちの人のモットーなの」

「俺も師匠の作った麻婆豆腐食べ慣れてなければ多分箸が止まりましたけどね。ところで1つ、牡丹さんに聞きたいことがあるんですけど」

「あら?何かしら?答えられることならなんでもいいわよ?」

狙った訳では無いけど、他のお客さんもいなくなつたおかげで牡丹さんが俺につきつきり。なので、さつきから思つてた疑問をぶつけてみる。

「俺、牡丹さんの名前は聞きましたけど、自己紹介してないですよね?なのに牡丹さんは

俺の名前も年齢も知ってた。何故なのかなって」

俺が牡丹さんの年齢を間違えた（実際は正確に何歳かは知らないが）時に『あなたより1つ年下の娘がいる』という言葉とさっきの『空翔君が初めて』の2つ。俺は世界大会3連覇してはいても、ジュニアなのと師匠が目立ちすぎて俺の名前はそこまで広まってない。活動拠点のイギリスではプロに最も近い日本人と呼ばれていても、日本では知る人ぞ知るレベルだからな。

「隠してたつもりじゃないのだけれど、龍ちゃんから連絡があつたの。俺の弟子がお世話になるかもしれない、もしそうならよろしく頼む………って」

「龍ちゃん………まさか師匠!? あ、煉獄お代わり2辛で」

「そうよお? 龍ちゃんが小さい頃はお姉ちゃんお姉ちゃんって私の後ろにいつもいたんだから。はぁーい」

うっそお………

「あ、それと牡丹さん。このお店の換k「おかーさん! 煉獄出したんならちゃんとお換気してよね!」」

………ん?

俺が言おうとした事と同じ様な言葉がお店の扉を開ける音とともに聞こえ、ふとそこらを見る。そこに居たのは………例えるならミニマム牡丹さんだった。

side 真白

「はふう………疲れたあ」

FC部の今日の練習が終わり帰路に着く私、有坂真白は半分ぐったりしてフラフラ飛んでます。

「春休み入って練習がさらにハードになったからにや〜」

「晶也先輩、選手復帰して気合い入ってますもんね〜。今日は乾さんも来てましたしね、みさき先輩〜」

冬休みは寒い季節の関係であまり空を飛びまくる練習は出来なかったから、春休みこそは！と晶也先輩が変に気合い入れてるんですね。今日は明日香先輩のライバル、海凌の乾さんが練習に参加していたので余計に気合い入ってました。明日香先輩のところに泊まってみたいですよ、乾さん。

私は練習用フライングスーツと競技用グラシユを入れたバッグを下にぶら〜んとぶ

ら下げてそのままゆつくりと停留所へ。

「みさき先輩、今日はこの後うどん食べていきます?」

「ん?んー………嬉しい提案だけど、今日は遠慮するにやー」

「わかりました!ではまた明日!」

「また明日」

脱力して手をヒラヒラと振るみさき先輩と別れ、私はすぐそこにある私の家、ましろうどんへと向かいます。ましろうどんのお店は2階が私の家なんです。

この後何しようかな。お店の手伝いは今日はないから、モンタツタで晩ご飯までくつろごつかな。

「で、ご飯食べたあとに少し自主練を〜ふぐあ!?!?」

お店の扉に手をかけて開けようとしたその時。鼻を刺すような刺激臭がツーンと。それもかなり強いやつが。このお店でそんな匂いがするってことは………え?まさかアレが出たの?

私はさつさとそう結論付けて勢い良く扉を開け放ちました。

「おかしさん!煉獄出したんならちやんと換気してよね!」

案の定他のお客さん誰もいなくなってるじゃない!って………ええ!?!?

「煉獄………完食???」

煉獄味噌煮込みうどんだったと思う赤いドロつとしたものが少し着いた器はほとんど空。あれを食べ切れる人いたんだ……………

「……………どうかしましたか？」

それを食べたらしき人、見たところ私と歳もそう変わらない男の人がこちらをキョトンと見つめて来てるので、無視するわけにもいかずに声だけかけてみる。

「あー、ごめん。何でもないよ」

「そうですか……………えっと、ごゆっくり。おかーさん、私先に上行ってるね」

少し気まづくなつた私は少しだけ言葉を交わしてから逃げるように2階に駆け上がりました。アレ？あの人どこかで見たことあるような……………ないような……………気のせい？まあいつか。

side out



## 数時間後

もう日も落ちて、隣の倉科家へマカロンのプレゼント兼挨拶も済ませて、夜の7時を過ぎた頃。俺は自室の部屋にいた。

あの後牡丹さんから謝られたけど、あれは不可抗力みたいなものだし、気付かなかった俺にも非はある。あの子の言い分は間違っていない。今思えば、頼んだ時の他のお客さんの反応で気付くべきだったのかも知らない。匂いもキツかったしな。でもまた食べに行きたいな。

「今度は人のいなそうな時間狙っていくか〜」

それにしても、ミニマム牡丹さん風の見た目と牡丹さんを『おかーさん』と言っていたことから察するに、牡丹さんが言っていた俺の1つ年下の娘があの子だろう。

ベージュっぽいロングヘアをツインテールにまとめていて、目は綺麗なアメジスト。欧米人と比べて童顔傾向のある日本人の中でも、かなり童顔っぽさのある顔立ちで背丈はだいぶ小柄。お世辞にも見慣れた欧米人女性みたいに大人っぽいとは言えず、子供っぽいという感想が真っ先に出てくる容姿ではあったけど、あの子の場合それが逆に魅力になっていて、素直に言って可愛かった。そういう意味だと白瀬さんとこのみなもちゃんもそうだけど、何故か俺はミニマム牡丹さん（そーいや名前聞いてないや）の方が気になってた。

その子の持ってたバッグからはグラシユが見えてて、多分練習帰りだったんだろう。ちらつとしか見えなかったけど、色と見た目から判断して恐らくスモールグルーヴ社のシヤムだ。確かスピーダー向けで、俺のゲイボルグに比べて遥かに大衆向きで使いやすい女の子に人気のモデル……だったよな？

「ま、フライングサーカスやつてるなら遅かれ早かれ会えるだろ。ましろうどんにも通いたいし、そこでも意外と会えるかもな」

とりあえず俺は小型のブイと競技用のグラシユ、予め買っておいたスポドリを持って家を出る。確か近くに海岸があった。食後の運動兼ねてそこで練習するか。

この時の俺は、この時の行動が生涯を決めるような事件？に繋がることをまだ知らなかった。

## 第4話 スピーダーの人のかな

「これでよし………つと」

住宅街から少し離れた灯台の上空、そこに俺はいた。練習用の小型ブイを試合同様に300メートル離して設置して準備完了。けど、ブイ本体とそれをつなぐラインが光るとはいえ、時間が時間だからさすがに距離感覚は狂うな。暗いから。

住宅街から離れたところまで来たのも同じ理由。ブイとラインの発光はそこまで強くないけど、迷惑になったらいけないからな。

「これ、師匠から借りてて正解だったかな」

そこで俺は持つてきていたバイザーを着ける。これは夜間飛行用の暗視ゴーグルで、赤外線センサーを利用して夜間でも昼間のように明るく見える。夜間とは言っても、普通に飛ぶだけなら使わないんだけど、ブイを設置実戦向きの練習だと何かと重宝する。

「それじゃあ、始めますか」

俺は軽く柔軟し、暗視ゴーグルのスイッチを入れて練習を開始した。

## side 真白

「あれ？誰かいる？」

晩ご飯を終え、モンタツタを少ししてリラックスした後の自主練習の時間、いつも私  
が飛んでいる住宅街から少し離れた灯台に来てみると、夜の空にブイらしきものが浮い  
てて、そこを濃い水色のラインが行ったり来たり。たまに止まったかと思えば直ぐにま  
たそれは行ったり来たり。ある時は真っ直ぐ、またある時は上昇下降や左右の動きも交  
えたその動きは私も見覚えがあるそれでした。

「こんな時間にFCの練習？私以外にここでする人いたっけ？莉佳は最近来れてない  
し」

こんなところで練習する人に私は心当たりは全くなく（強いていえば以前1年生同盟  
を組んだ莉佳くらいだけど、あの飛び方は基本的に忠実な莉佳のそれじゃないし、そもそ  
もコントレイルの色が莉佳はもつと薄い）。すぐその灯台にあるベンチに匍置いて  
あったから、その持ち主だと思うけど。

「スゴい……………スピーダーの人のかな」

コントレイルとブイの光しか見えないけど、その飛んでる軌跡は晶也先輩や莉佳に教わった基本からは少しズレているようにも見えるけど、とても綺麗で、私は少しの間見蕩れてた。そして何より速かった。

「ん？ 人気のない所選んだつもりだったけど……………見学……………じゃないか」

そして気付くとその飛んでる人がこつちに降下してきた。見た感じ背丈は晶也先輩くらいだけど、髪は茶髪で元部長くらいの短髪。なんかバイザー付けてるし。なにあれ少しかっこいい。

その人は私の少し上空でバイザーを外した。あれ？ この人どこかで……………

「そのグラシユ……………ああ、ましろうどんで会ったミニママ牡丹さん」

「え？……………ああーうちの煉獄完食した人!! つかミニママ言うな!」

そのまま地上まで降下したその人は私を一瞥（本当にチラッとだけ）してミニママ言ってきた。失礼な!

「ごめんごめん。でも俺、君の名前知らないし」

「真白です、有坂真白!」

確かに学生の時のおかーさんに比べたら胸はちっちゃいし背も低いけどさ! ミニママって覚え方はないと思う!

「じゃあ真白ちゃん」

「んなあ!?!子供扱いしないでください!」

だからってちゃん付けはどうなのさ!初対面から馴れ馴れしくしないですか!?

「まあ、ミニママよりはマシだから良いけど……………それより私が名乗ったんですから名前教えてください。礼儀ですよ」

「別に隠してるわけじゃないんだけどな。天野空翔だ。今日四島に引越してきた。よろしくな」

天野空翔、と名乗ったこの人はバッグからタオルとペットボトルを取り出して汗を拭い、ペットボトルの中身を飲みました。

そのあと少し休憩、という空翔さん（私のことを名前で呼ぶんだから、私にも名前で呼ばせて欲しい、と言ったら即答でOKされた）がブイは使っている、と言うので、そのブイをありがたく使わせてもらって練習をスタート。

数分くらいしてから休憩を終えた空翔さんが2、3アドバイスをくれたり、2人いるからと1対1の練習やちよつとしたレースみたいなのもしたりすること約1時間。

「さて、と。このくらいにしとくか」

「はいっ……………っ、ふう。ありが、とう……………ごさいます」

……………ってキツすぎですよ!?!普段の晶也先輩の練習並ですよ!?

あ、でもきつと空翔さん、私に合わせてレベル落としてくれてたんだと思う。だって空翔さん、今全く息切れてないし汗もかいてないもん。私が来た時はそれこそ一試合終わらせたのかな？ ってくらい息を切らして汗もかいてたのに。

「これ飲みな？ 俺が口付けてない方の新しいやつ。あとタオルな。汗拭かないと体温下がって風邪ひくぞ？」

「あ、ありがとうございます……んっ……っ……ふは」

私は空翔さんが渡してくれたスポーツドリンクを半分くらい一気に飲み干し、顔や手の汗を拭いていく。

「あと上にこれ着とけ。まだ時期が時期だから冷やすと大変だ。年頃の女の子なんだし、今服の下まで汗拭くわけにいかないだろ。上着とタオルは今度店行く時に返してくればいいからさ。帰ったら早めに風呂入りな？」

いや、手厚過ぎない!? ありがたいけどさ!?

というか私に上着渡しちやったら空翔さんが薄着に……

「ん？ ああ、俺が前住んでたところここよりずっと寒かったからこれくらい平気平気。それとも立てない？ もしそうなら家まで背負うけど？」

「心読まないでください！ あとちゃんと立てるので大丈夫ですよ！」

「そう？ じゃあせめて真白ちゃん家のすぐ側にある停留所まで送るよ。女の子一人は危

ないもんな」

「だーかーらー！大丈夫ですつて！四島で私みたいなちんちくりんをどうかするような人見たことないですよ！ここからすぐですし！」

「方向同じだし、ついでなんだが……」

「だから大丈夫つて言ってるじゃないですか！そこまでお節介焼かれても迷惑なんですよっ！行くにゃん！」

お節介焼きな空翔さんを放置して、私は渡されたジャージを羽織つて家の方に飛び立ちました。少しして振り返ってみると丁度対岸、晶也先輩や明日香先輩の家のある方向かって水色のコントレイルが伸びてました。

「……………方向、全く違うじゃないですか」

翌朝私の家の洗濯カゴから空翔さんの名前の刺繍入りのFCイギリス代表ジャージが出てきて我が家（主に私とおとーさん）が混乱するんですが、それはまた別の話。

side out



side 龍月

——東京

「失礼します。神代龍月、参りました」

日本の首都、東京。その真宿にあるタワービル高層。慣れないスーツ姿で、そこにあるやけに仰々しい扉をノックして俺は名乗る。

「ん、入りました。待っていたよ」

「急な要請ですまないね」

中からの許可を得て部屋に入ると、そこにあるのは幅5メートル長さはその倍くらいはありそうな楕円のテーブル。既に20人以上がその周りに座っている。どうやら俺が最後までらしい。というかこの会議自体俺の日程に合わせて計画されたみたいだしな。

見たところここに来ているのはFCの連盟、その各部門各地のお偉方のようだ。ほぼ全員いる。俺はさしずめ選手代表つとところか。

「やあ、随分な重役出勤じゃないか」

「そう言うな。向こうのお偉方に話通して空翔の転入の手配してたら今が精一杯なんだ。ここにいる全員そこは理解してもらっている。どうか葵も来てたんだな」

「まあな。こんな面白そうな話、乗らない手はないよ」

「ふっ………違くない」

俺が座った席の隣には各務葵が座っていて、少々言葉を交わす。丁度そこで部屋の照明が落ち、スクリーンに画面が投影される。

「それでは決めていこうじゃないか。新たなFC………『団体戦』についてを」

side out

件の夜の練習でと出会いから数日後。あれから真白ちゃんとはギスギスした雰囲気になってしまっていた。と言っても、会う機会が多い訳では無いが。具体的には翌日昼過ぎに俺がご飯時から少し遅らせてましろうどんに行った時、FC部の練習に出る真白ちゃんと1度出くわした時だけ。その時は俺がどう声をかけていいか躊躇った隙にぶつきらぼうに「いらっしやいませ」とだけ言ってさっさと行ってしまった。それから少し日が空いて今。今日は真白ちゃんは店の手伝いらしい。全く顔を合わそうとして

くれないけど。

牡丹さん曰く「あの子は人見知りか激しいから」とのことだけど、何とかしてあの夜のこと謝らないといけないよな。ちなみにジャージはナイター練習をした翌日（真白ちゃんとましろろうどん前で遭遇した日）に牡丹さんから返してもらっている。

「今日は真白ちゃんもいるんですね」

「ええ。今日はいつもの練習が午前中だったのよ」

「ああー、それで。あ、注文はいつもので」

「はーい。真白おー、換気扇入れといてもらえる〜?」

牡丹さんの言葉に、別のテーブルを拭いていた真白ちゃんからは「いいと返事が返ってくる。ただ、アレだな。少し目が合っただけでそっぽを向かれる。地味に傷つくぞ、これ。事の発端は俺（牡丹さん曰く素直に善意を受け取れない真白が悪い）だから下手なこと言えないけどさ。」

「なんなら私から真白に言って謝らせましょうか?」

「あはは………余計拗れますよ。俺の方で何とかタイミング見て何とかします」

「でも、ああなつた真白は手強いわよ〜?」

「おかしさん! 喋ってないでテーブル拭くの手伝って!」

おおー、牡丹さんと喋ってたら真白ちゃんがキレた。間違ったこと言っていないだけに

牡丹さんもN oとは言えなさそう。お店、地味に広いからな。机拭くの1人じゃ大変なのは間違いないし。客は俺1人で隅の小さいテーブル席だから、ほぼ全部のテーブル拭かないといけないし。

「……………本当ならお客さんの前であんな態度ダメなんだけど」

「客つても俺だけですし、ああなった原因作つた本人なんで、そこはノータッチでお願いしますよ」

最後に「ごめんなさいね」とだけ残して牡丹さんはカウンターの奥へ行ってしまった。さて、と。どうするかな。俺できるまで少しかかるし……………久々にアレやるか。

♪♪♪♪♪(モンタッタのテーマ)

暇潰しにPSQでモンタッタでもやるかく、とPSQ(モンタッタ2C初回限定生産版特別仕様)を取り出してイヤホンを取り付けたところで、ポケットの中の俺のスマホから着信を伝えるモンタッタのテーマ曲が流れてくる。この曲良いよな。超大型モンスター討伐戦のクライマックスとかでも流れるけど、テンション上がる。

「やっべ、マナーモードしてなかった。着信……………師匠?向こうは今早朝なはずだけど」  
あ、切れた。と思つたら即ニヤインの方に反応。「夜にまた電話する」……………それだけかい!

それから改めてモンタッタ3を起動。一応最新作の3Cが出てるんだけど、すごい人

気作みたいでイギリスからの取寄せが出来なくて、まだ買えてない。出来ることなら初回限定生産版の特別仕様（今持つてるやつは3C版）欲しかったんだけど、2Cの時の上の売れ行きで断念。あの新種の看板モンスターがプリントされたPSQ欲しかったんだけどなあ……………

一応俺、向こうではソロでしか出来なかったこともあって、ほぼ全部のクエストをソロでこなせるようになってる。さすがに敵によつては時間かかるけどな。隠しボス敵なミラバレウス種3体は時間いっぱい使うし。大抵残り数分とか。ちなみにHRはもうすぐ400。

今日は何狩るかな……………最近やってないガオシヤンロンでもやるか。あのデカブツ。最後にテーマ流れるし。難易度はいちばんたかいやつで、つと。

で、狩りを開始して少し。たまに真白ちゃんの見線を感じながら狩りを続行。と言っても、うどんが出来るまでそんなに時間かかる訳でもないの、開始少ししたところで、ましろうどんの俺の好物の煉獄味噌煮込みうどんが到着。ちなみに持ってきたのは真白ちゃんだった。

「お待たせしました、煉獄味噌煮込みうどんです」

「お、来たか。いただきまーす」

俺は狩りを一時中断してPSQを置いて食事に入る。んー、やっぱ美味しいな。辛くて

美味しい。

「空翔さんってあの空翔さんだったんですね」

「ん?」

「日本人学生で最もプロに近いスカイウォーカー………でしたっけ? 名前聞いた時には聞いたことがあるような名前だなく程度でしたけど」

あれ? 気付いてなかったんだ?

「あのジャージ見て大変だったんですよ? 特におとーさんが。おかーさんはなんでか冷静だったんですけど」

「牡丹さん、俺の師匠と幼馴染らしいからな。事前連絡いつてたらしいよ」

「ふーん………それじゃあごゆっ………く………りい………!?!?」

びつくりしたあ。真白ちゃんなんか百面相の勢いで表情変えながら机の上を凝視。視線を辿ってみると………俺のPSQ?」

「(こ)(こ)(こ)(こ)これって! モンタツタ2C初回予約特典の中でも少数だけしか生産されなかった数量限定で抽選を勝ち取らないと手に入らない超レアな限定版仕様のPSQじゃないですか?! どうしてこれを!?!」

「どうしてって………そりゃそれが付いてくるヤツ買って、抽選に応募して勝ち取ったからな」

当たり前だろ？

「いやいやいやいや、これ知ってると思いますけど、極少数しか生産されなかった超レアなやつですよ!?! 抽選も倍率は脅威の100倍越え! を手に入れようと思つて手に入れられるものじゃあ……」

「まあ、あの時は運が良かった、としか言えないかな。触りたかったら触つていいよ? なんか中中のデータ見ていいぞ? やつてるクエストも破棄しちゃつて良いからさ」

ふおおおお……と鼻息を荒くして恐る恐る俺のPSQを手取る真白ちゃん。余程のモンタツタファンなんだな。可愛いけどちよつと怖い。

「本当なら3Cの特別限定版仕様も欲しかつただけだな。そつちは抽選じゃなくて一般販売だつたし数も多かつたから行けると思つたんだが……通常版すらも買えなかつたとは驚いた」

「日本では3Cの人気度は物凄いですから。それこそ2Cなんか比較にならないくらいに。あれ? となるとこのソフトは?」

「前作の3。イギリスだと一緒にプレイする人もいないからほぼソロでやつてた」

その後も煉獄うどんを食べている横で俺のデータを見ていく真白ちゃん。大抵の武器の使用回数がカンスト間近(メインで使っている大剣は当然カンスト)だつたり、隠し含めた全モンスターをソロ討伐した記録があつたりしたことに驚く姿を見るのはな

かなか新鮮だった。そりや、イギリスでは相手がほとんどいなかっただけだから。やり込んだらこうもなる。

そんなこんなで煉獄うどんのお椀を空にして割り箸を置くと、PSQを見終えた真白ちゃんがそれをお盆に回収して持っていく。

そして俺のところへ帰ってきた。何で？

……って思ったならその手には真白ちゃんのPSQ。ちなみに俺が手に入れなかった3C限定版のやつだった。羨ましい。

で、結局その後晩ご飯の時間まで真白ちゃんと3でマルチプレイ。3Cは俺が持つてないからな。この間のこともその途中で謝った。なんだかんだで真白ちゃんもそのことを気にしていたようで、「レアな物見せてくれたから許します」って手打ちしてくれた。

そこで驚いたのは真白ちゃん、HRが俺よりも100近く上ですごく上手かったことだ。ソロに特化した動きの俺になんだかんだ文句言いながら完璧に合わせてきたしな。

ちなみに晩ご飯は牡丹さんから誘われたけど断った。



牡丹さんからの晩ご飯のお誘いを断った俺はそのままのんびりと家まで飛ぶ。んで、上空からチラッと見てみたんだけど、俺の家（厳密には師匠の家）の前に引越し用トラックが来てた。当然師匠………と思うかもしれないけど、違うって言いきれぬ。だって師匠が来るのまだ先だし。さつきその犯人からニヤインに連絡入ってて、それもあつて牡丹さんからの誘いを断って帰って来たわけよ。

「……………ただいまー」

丁度引越し業者さんの仕事も終わったみたいで、入れ違いで家に入る。キッチンの方からなにか音聞こえてくるし………料理でもしてんのかな？同じところから「おかけりー」って声もする。とりあえず声の主がいるキッチンへと俺は向かう。キッチンにいたのはスーツの上からエプロンをして、綺麗な銀髪のロングをポニーテールに纏めた女性。

「つたく……………こつち来るのはいいけど、もう少し早く連絡くれよな、姉貴」

「えー？それだと空翔くん驚かないでしょ？」

「いや、ここに驚きはいらねえだろ」

「いるよ？ おねーちゃんが面白くないもん」

「もんつてなんだよもんつて……………」

この人はツバキ・カミシロ。年齢は乙女<sup>2</sup>の秘密<sup>4</sup>。生まれも育ちもイギリスな日本人でMIZUKI社イギリス支部の社員だけど、仕事で師匠<sup>上の命令</sup>のマナージャー兼セコンド兼身の回りのお世話をしてるわけ。ちなみにメイドではない。

名前が英国風な読み方してるのはずっとイギリスにいたから、らしい。和名で言うると神代椿。神代姓で分かるように師匠の血縁で従姉妹にあたるらしい。今の仕事してる理由も半分くらいこれで、気兼ねしないから、とは姉貴本人談。俺は姉貴って呼んでるけど、当然血の繋がりはない。

趣味はお菓子作りで、特に手の込んでいる和菓子以外なら大抵作れる(姉貴談)。一番得意なのはザツハトルテ。俺のお菓子作り趣味も姉貴の影響がかなり大きいな。当然お菓子以外の料理も美味い。

何かと気遣い出来るし、フライングサーカスに対する知識も半端じゃなく、今の俺があるのも姉貴に寄る部分もかなりある。あ、本人は選手としては並以下なんだけどね。その分マナージャーとかセコンドとかに特化してるわけ。

ここまで言うとう完璧超人見たく見えるけど、ちゃんと欠点もある。たまに子供っぽい

思考や口調になることと、営業させると何かとミスを繰り返すポンコツさが良い例である。けど、持ち前のルックスと押し強さで大手の契約を取ってくることもしばしば。営業ポンコツなのに業務実績はイギリス支部でもトップクラスという謎の女、とは師匠談。何言ってるのかよくわからないって？大丈夫、俺もわからん。

あとこれは余談だけど、姉貴繋がりとの関係でよくMIZUKI社の新商品（FC関係のものが主）のモニターをよくやったりもしてる。自主トレで使った小型のブイとかがそれに当たるね。その報告書はもう提出済み。現品はなんかくれた。

「ま、冗談はこれくらいにしておいて」

「絶対本気だったよな……………」

「はいそこ、無駄口聞かない。龍月くんが進めてた空翔君の編入手続きその他諸々にキリがついてね。あとは今やってる仕事が終わってからこっち来るみたいだよ。あ、制服とか教科書とか最低限必要なものは空翔くんの部屋に置いてるから確認しておいてね？足りないものあったら買うからね。経費で」

経費で!?

「……………了解。晩飯前にすませとく」

「あとは……………ああ、空翔くんの編入する学院……………久奈浜学院だったっけ？そこに臨時講師って形で龍月くんも赴任するって言ってたよ？1週間ほど遅れるとは聞いている

けど」

「……………は？」

いつの間に教員免許取ったんだ師匠……………

「まあ、いいや。姉貴の奇行は今に始まったことじゃないし」

「酷いなー。おねーちゃんでも傷付くよ？」

「冗談だつて。どうせプロ復帰して久奈浜学院辞めた各務さんの後釜決まるまでの繋ぎだろ？それに師匠のことだからプロ片手間で免許とつても納得出来る」

「あははは……………否定出来ない。ま、それはそれとして、ご飯まだかかるからやることやつといで〜」

「はーい」

こうして、時は流れて4月。俺の新しい学園生活が始まる。

「……………時は流れてつて言っても数日だよな？」

## 第5話 え?100周がいい?

side 晶也

今日は4月1日。何の日かは分かるな?そう、始業式だ。今日から俺達は3年に進級していわゆる受験生になった。あまり実感は湧かないけどな。

ちなみに式自体はさつきばばつと終わったとこだ。で、今はホームルームまでの少しばかりの空き時間。

「あくうく……どうしよう。一世一代の大ピンチだよ」

と、そんな俺の横で机に突っ伏して項垂れる窓果。まるで顔の穴という穴から魂が抜けていつてるみたいだ。ま、何を言いたいのかはだいたい分かるけどな。

「元部長さんが卒業していなくなっちゃいましたからね。これで新米部長さん、晶也さん、みさきちゃん、真白ちゃん……わわわっ!4人しかいませんよ!」

「おい、自分のことカウントしてないぞ。明日香退部すんの?」

代弁ありがとう、明日香。けど、みさきも言うように自身を数えてないな。「辞めませんよお」と慌てる明日香を慰めるみさきはどこか眠たそうだ。いつも通りか。

「部員はギリギリ5人だから同好会ってことは無いけどな。それより深刻なのは顧問だ

ろ？」

そう、今俺達にとって最も深刻な問題、窓果に言わせるところの一世一代の大ピンチは俺達のFC部が顧問不在なところだ。去年は各務先生が引き受けてくれてただけで、3月いっぱい辞職してしまつたらしい。何でもFCのプロに復帰するんだとか。これでも本来なら去年の秋大会後に辞職するつもりだったのを3月いっぱいまで引き伸ばした（他の先生方が説得した）らしい。FC部の練習にもほとんど顔を出さなくなつてたしな。元々あまり顔出さない人だったけど。

「一応誰か空いてる先生に名前だけ借りるって手もあるんだけどね。けどそれだと日向くんの負担が増えちゃうでしょ？」

「そうだな。次の夏大会は本格的に選手復帰するし、そうなる時さすがにみんなのことを指導する余裕はないかもしれない。それで降は受験が控えてるしな。コーチと選手を兼任していた真藤さんの凄さを痛感するよ」

「そもそも明日香のレベルが高すぎて日向君自身の練習片手間って訳にはいかなくなり始めてるもんね。私がコーチも出来たら良かったんだけど……」

3月いっぱいはまだ本格的な練習はしなかったから何とかなつたけど、年が明けてしまつた今はそうもいかない。GWには去年みたいに高藤と合同練習の予定（向こうの新部長の佐藤院さんと話して決めた）だしな。

最悪白瀬さんをお願いするしか……いや、でもお店があるしなあ……

「それはそうと晶也さん、その空いた席はなんなんでしょう?」

「さあ………座席表も空白だったしな」

「もしかして転校生!」

「片付け忘れてたんじゃなくい?」

片付け忘れはないだろ。

「お前らー?席につけー」

つとと、そんなこんなと話してたら先生だ。確か数学を担当してる山本先生だったな。

その山本先生の一言で蜘蛛の子を散らすようにみんな席へと帰っていく。……あ  
れ?先生の後ろについて入ってきたのって

「沙希ちゃん?!」

そう、明日香の言う通り、久奈浜学院の制服で身を包んだ沙希ちゃんこと乾沙希だった。

——放課後

久奈浜学院

「なるほどなく。それでこつちに転校してきたんだ」

「うん。それだけじゃないけど大体あつてる」

午前中だけの授業を終えて、俺達FC部メンバーと乾は部室たる廃バスで昼飯ついでに急な転校について乾から聞いていた。ライバルたる明日香と一緒に空を飛びたい、一緒に研鑽したい。それだけでは無いらしいけど、要はそういうことらしい。

休み時間に聞かなかったのかつて？ 転校生だぞ？ 恒例質イベント問があつて聞く機会がなかったんだよ。そういうや、隣のクラスか？ から黄色い悲鳴みたいなのが聞こえてきたな。きゃーって。語尾にハートが大量につきそうなやつが。他のクラスにも転校生が来たのかな？ 乾がいるんだからイリーナ……で女子からあんな声は出ないか。じゃあ誰だ？

で、今日は午前中だけ授業があつて、午後からは俺らみたいに部活がある人だけ弁当持参で部活つてわけだ。ま、俺はこの後着替えに校舎に戻らないといけないんだだけな。

「ごきげんよう、皆さん。お早いですね」

「こんにちは……あ、やっぱり沙希さんもいたんですね」



おっと、これは珍しい組み合わせ。乾がいるからそうだろうな、とは思ってたイリーナ（もちろん久奈浜の制服だ）と真白。恐らく真白がここまで案内してきたんだろうな。ここ、知ってないとまず来れないし。

まあ、それはそれとして、当面の問題は顧問………出来ることなら指導の出来る人がいいよなあ。最悪は窓果も言ってたように空いてる先生に名前借りるしか。俺の個人練習時間、取れるかなあ………

side out

「おー、やってるやってる」

転入の手続きやクラスでの自己紹介、それから午前中の授業を終えて今はFC部の練習風景を眺めてる。自己紹介が地味に疲れた。まさか「師匠は神代龍月です」って言うたら女子全員が悲鳴あげるんだもん。師匠人気すぎでしょ。

場所は久奈浜学院近くにある海岸、久奈浜学院FC部はそこで練習してる。地上では

マネージャーの子がデータ取り、上空では日向君がコーチとして練習を進めてる。

ただ、このままだとダメだな。いや、練習方法がダメとかそういう意味じゃなくてな。さつき職員室行つた時にも言われたんだけど、顧問がいないこと。的確な指導者がいないこと。それが1番の弱点と言える。

今は日向君がコーチをやっている。以前はそれでよかつた。日向君はコーチに専念できたからな。けど、その日向君が選手復帰した今はそうも言つてられない。自身でも練習しないといけないからな。複数人を教えると言つても、そこに自分自身を含めると何かと難しくなる。客観的に見れなくなるからだ。マネージャーの子とリーナちゃんがいるからそれでもまだマシな方みたいだけどね。

見たところマネージャーらしき子はコーチに向いてないっぽいし、リーナちゃんも複数を見るとなると難しい。ずっと沙希ちゃんだけ見てきたわけだから無理もない。

さらに明日香ちゃんという俺に匹敵する世界レベルのプレイヤーがいるとなると、ブランクの長い日向君自身の練習片手間だと難しいよな。

「かと言つて俺が加わつても事態が悪化するだけだしなあ……俺はコーチングは出来ないし。個人練習だけしてたらチーム内の士気にも関わるしな」

「簡単なことだよー。何の為におねーちゃんが来たと思つてるの〜?」

「え?そりゃあ追々くる師匠の補佐………つてええええ?!?!」

姉貴!?何で?いつの間に?

「空翔くんの言うことだと半分正解。もう半分は……今思ってる通りなんじゃないかな?ほら、行くよー?」

「え?ちよつ……待つ……姉貴!」

気付いたら俺の隣にいた姉貴は、そう言う俺の手を取り、リーナちゃん達の元へ。それに気付いたリーナちゃんは……うん。だろうな。完全に絶句してる。隣のマネージャーの子はポカーン。うん、だろうな。

「やつほー、イリーナちゃん。久し振り〜」

「え?ええ!?!ツバキさん!?!空翔まで!?!」

「え?え?え?」

うん、そりゃあそうなるか。俺にもわかってないし。そんなこんなしてる内に空にいた人達全員降りてきた。真白ちゃんやつほー。

「お、ちょうどいいタイミングで集まってくれたね。軽くミーティングしよつか〜」

「ミーティングは良いんですけど……誰ですか?隣にいるのは……もしかして天野空翔!?!」

「あはは……久し振り、日向君。みんなも練習お疲れ。まだ始まって大して経ってないっほいけど」

とりあえず降りてきた5人には姉貴が持つてきてたスポドリを渡しておく。

「天野さん!?!ということは神代さんも!?!」

「空翔、でいいよ、明日香ちゃん。知らない仲じゃないだろ?というかやつぱり日本では俺がいる神代龍月師匠がいるって認識なのな」

「空翔くんは有名だけどジュニア止まりだから仕方ないよ。ほら、そんなことよりミーティング。まず私はツバキ・カミシロ。件の神代龍月の従姉妹だよ。一応M I Z U K I社、明日香ちゃんや龍月くんのグラシユのメーカーね、の社員で出向扱いで彼のマネージャー業務もやってるの。今は龍月くんの要請で臨時の外部コーチに来たんだけよ」

え………マジで?師匠そんなことしてたの?聞いてないよ?1週間くらいでこっち来る、とは聞いてたけど。

(まあ、でも姉貴が来るって連絡すらなかつたしなあ………)

「空翔さん空翔さん」

師匠は連絡が行き渡る前に行動起こすからなあ………とか考えてたら隣から俺のシャツの袖を引つ張られる感覚が。振り向くといつの間にか真白ちゃんがそこまで来てた。

「あの人大丈夫なんですか?私みたいなレベルの人相手ならともかく、こっちには世界

レベルの明日香先輩がいるんですよ? 沙希先輩も間違いなく全国レベル以上ですよ?」  
「ああ、その事か」

まあ、姉貴は普段ほんわかしてどこか抜けてるし、マネージャーがコーチングまでできるとは限らないしな。

「とりあえずは大丈夫。姉貴本人の運動神経は並程度だけど、それを補う知識がある。それに俺の師匠がいない時のコーチは姉貴だぞ? 自主練のメニューも少し前までは全部姉貴が作ってたし、今でもそれを参考にしてメニュー組んでる。マネジメントの一環とか言ってたっけ」

「ふう〜ん」

「あ、でも真白ちゃん……………ともしかしたらあの黒髪の子「みさき先輩です」……………みさきちゃん少し覚悟しておいた方g「空翔くん。とりあえず今はこの子達に集中するから終わるまでひたすらその辺飛んで。3倍で50周ノルマね」

「……………つう訳だから行つてくる。クリアードフォー・テイクオフ!」

それ以上言うな、つてことか? 流石にそれは鬼

「え?100周がいい?」

「50周逝つてきまアアす!」

side out

side 真白

空翔さん、飛んでつちやいましたね。ものすごい勢いで。

「3倍を……………50周……………」

あ、あれ？沙希先輩震えてませんか？と言うか3倍50周ってどゆこと？とりあえずものすごい距離飛ばされてるっただけは良くわかるんだけど。

「ん？ああ、今のは普通のフィールドフライだよ」

「でも、それにしても乾が怯えて……………」

「ただし、1辺の長さが3倍のフィールドフライだけだね。あー、沙希ちゃんは……………いや、こつちで。1年でどこまで変わってるか見たいし」

えつと……………普通1辺300メートルだから3倍で900メートル？それを50周だから……………わかんない！

「……………トータル180キロ以上」

……え?

「「「ええええええ!!?」」」

「大丈夫だよ。君たちにはまだあのレベルはさせないから」

まだ!? てことはいつかはやるの!?

「空翔くんのことは脇にでも捨てておいて、練習やるよー。と言っても私は君たちの実力をおおよそしか知らないからね。とりあえず変則フィールドフライ10周から。明日香ちゃんは最初はフォースライン上で妨害。軽く邪魔するだけで本気のデイフェンスはしちやダメ。みんなはそれを避けて飛んでブイタッチ。お互い攻撃は禁止だよ。全員明日香ちゃんを抜いたら最後の人が妨害役交代。窓果ちゃんはみんなの1周毎のタイム計測お願いね」

——約1時間後

「ひい……………ひい……………」

「あー、もうダメ。死にそう」

件の変則フィールドフライから1対1のドッグファイト連戦やラインダッシュ、ローローやハイローローみたいな基礎練習をみっちり1時間。正直私たちは汗を滝のように流して全員グロッキーになってます。晶也先輩なんかこんな時期なのに頭から水を被ってるし、みさき先輩は顔の穴という穴から魂が出てるっ!?

というか私たちの実力を測るって言ってたけど、ここまでするの!?

「高藤の、トレーニングも……ここまでじゃありませんでしたっ」

「しかもこれでやっとな時間……だからな。ブランク持ちにはキツイぞ、これ」

ちなみに今は見ての通り休憩中。空翔さん（今更だけど先輩って呼んだ方がいいのかな）はまだ上空をものすごい速さで飛んでいます。ツバキさんは今イリーナ先輩や窓果先輩とデータを見えます。

「っ、ふう……ここまでキツイの、久しぶりだった」

「イギリスにいた時も、沙希ちゃんはこれくらいしてたん、ですか?」

「ここまでするのは、月一くらい。たぶん私たちの体力、の限界を見たいんだと思う」

明日香先輩と沙希先輩、晶也先輩はよく会話出来ますね!?

「はい、楽ししたままでいいから話聞いてね。とりあえずだけど、大体はみんなのこ  
と分かってきたよ。これから当面の課題を1人ずつ言っていくね」

そんなぐてーっとした私たちのところに分析を終えたらしいツバキさんが来る。



「まずは……………そうだね。明日香ちゃん」

「は、はいっ!」

「明日香ちゃんは少し素直すぎる節があるね。目線や予備動作で次動く方向がバレバレだから相手に動きを読まれやすいの。身に覚えはないかな?格上相手にした時に攻撃やフェイントが全く通用しなかったことが」

「あ……………はい、あります。空翔さんのミラーージュに触れませんでした」

「アレは少し例外的なところはあるけど……………その時、明日香ちゃんは事前にご攻撃するか考えてから行動してたでしょ?で、実際に接触する直前、空翔くんはその一瞬で明日香ちゃんの僅かな体の動きと目線で避ける方向決めてたんだと思うよ。避ける直前に嘘の動作、目線を混ぜることで明日香ちゃんの決断に揺さぶりをかけて動きを鈍らせつつ、ね」

「ちよつと待つてくさい?その試合見てましたけど、あの空翔先輩の爆速だと見てから判断するまで一瞬もないんじゃないですか!」

「見たのは目線だけじゃなくて、明日香ちゃんの動きを一挙手一投足くまなく観察してるわけだけだね。その辺は龍月くんが師匠な影響だね。龍月くんのドッグファイトを振り切ろうと思つたら動きを見てからじゃ遅いからね」

「あ、だから頭真つ白になっちゃつてとつさに動いた最後の攻撃は当たつたんですね?」

「正解だよ。それを毎回やれつてのは無理な話だから、対策は追々していこつか。で、次は——」

そこから沙希先輩やみさき先輩、私に晶也先輩のダメ出しがズバズバと飛んできました。ちなみにぎつと挙げると……

沙希先輩：バードケージに頼りすぎ。悪いことではないけど、それが通用しない格上相手（明日香先輩やみさき先輩みたいな）にはゴリ押しで試合を進めてる感じがある。実際それでみさき先輩には負けかけて、明日香先輩には負けてる。

みさき先輩：そもそも体力不足。あとは自信を過大評価する節があるのと焦ると冷静さを失いやすい。そこさえ改善できれば実力自体はいい線いつてる。

晶也先輩：技術は目を見張るものはあるけど、判断がコンマ数秒レベルで遅れがち。ブランクが長いから反復練習していこう。

と言った感じですよ。

え？私？

「そうだね………とりあえず、地力上げてこつか」

他のみんなとは違って、少し考え込んでからこの一言だけでした。

side out

それから約2時間弱ほど。姉貴の指導でみっちり訓練(アレを練習と呼ぶのには少し生温かった)を受け、今日の部活は終了……………

「まだ終わらないよー?とりあえず着替えたら部室ね。30分あげるよ。それから少しだけミーティングして今日は終わりだよ」

なわけないか、まだ16時過ぎだ。これからミーティングを少しだけやるらしい。姉貴は、汗を滝のように流して肩で息をするグロッキー寸前の明日香ちゃん達部員に声を掛けてから部室の方に行ってしまう。

俺は姉貴の訓練はよくやってたし、師匠との訓練だとこれでも温い方だからある程度は慣れてるのもあってまだ余裕はある。まあ、慣れてるとは言ってもキツイものはキツイんだだけだな。

「……………真白ちゃん。生きてる?」

「そう……………見えますか?……………見えるなら、眼科行った方が……………良いですよっ」

「……………まあ、だろうな。ほら、これ飲んで水分補給しとけ?」

「ありがとうございます」

グロッキー寸前のみんなの中でも特に酷い真白に声をかけてスポドリを渡しておく。姉貴はみさきちゃんを体力不足って評価してたけど（その評価自体は正しくて真白ちゃんの次に酷いのがみさきちゃん）、真白ちゃんはもつと体力が足りてない感じがある。要強化ポイントだな。姉貴が真白ちゃんの評価を先送りにした理由もだいたい察しがつくし。

「みんな、とりあえず汗拭いたら学院戻ろう。窓果ちゃんはみさきちゃんに、リーナちゃんは真白ちゃんとペアリングしてあげて。自力で飛ぶのはきついだろうから。明日香ちゃんと沙希ちゃんは1人で行けるな？無理そうなら2人でペアリングしなよ？日向君は1人で飛べ」

「俺の扱い雑すぎないか!？」

「男同士でペアリングする趣味はないし、日向君も嫌だろ?」

「男同士のペアリングっ!？」

おい窓果ちゃん何故そこに反応する。何なの?まさかそういう人種麻子なの?ちなみに唯一名前を知らなかった窓果ちゃんは鬼のフィールドフライが終わった時に名前を聞いた。

「ま、それもそうか。あと俺のことは晶也でいいぞ?他のみんな名前呼びだしな」

「じゃあ晶也は1人で飛べ」

「だから雑だつて!」

「反論する元気があるなら行けるな。それともペアリングして欲しいのか?」

うぐぐ………と苦虫を潰したような顔をする日向君改め晶也。そしてそのまま校舎の方へ飛んで行つた。

「あのく空翔さん………さすがに晶也さんの扱い酷くないですか?」

「ん?ああ、今の?別に拒絶したとかそういう類じゃないから大丈夫。真白ちゃんやみさきちゃんみたいに本当にダメそうなら小脇に抱えてでも連れてくよ。まあ、男同士のちよつとした戯れみたいなものさね。ほら、のんびりしてる時間はないよ?急いだ急いだ」

俺も校舎の更衣室向かわないとな。

「じゃあ、ミーティング始めよつか」

あれから予告通りきっちり30分後。着替えて部室たる廃バスで休憩しているとこ  
ろに姉貴が来た。

「1つ思っただけど、この学校ってシャワー室ないのな？運動部そんなに活発じゃないのか？そりゃ、高藤とかに比べたらそうなのかもしれないけどな。汗は拭きはしたけど、やっぱりシャワー浴びたい気もするしな。」

あと、なんで俺自然とここに混ざってるんだろう？部員じゃないのに。

「とりあえず大きな連絡事項は2つ。1つ目が新入生歓迎会、その部活紹介。これに  
関しては部長の窓果ちゃん、明日部長会議あるらしいね？そこでアナウンスあると思う  
からお願いね。詳しい内容は知らないけど、何ならミニゲームでも見せれば興味持つて  
くれると思うし。チラシとかも任せるよ。その時はイリーナちゃん、手伝ってあげて  
ね」

「おおお！やつと部長らしいことが出来るっ！」

「わかりました、新人マネージャーとして私も協力しましょう」

むしろ今まで部長らしいこととしてなかったんかいっ！

「1つ目はこれで終わり。2つ目、これがかなり重要なんだけど……FCそのものに  
関係する話だよ」

FCそのものに……？ルールが変わった、とか？まあ、去年の秋の大会でそれが起

きても不思議じゃない程度には色々あったからなあ……………

「今のFCの試合、これの主な形式はわかるよね？晶也くん」

「え？あ、はい。今現在の公式試合は地方単位から世界単位のものまで全て個人戦による勝ち抜きトーナメントで統一されてます」

「正解。まあ、これは実際やつてる君達ならわかるよね。でね、今年はそれが少し変わって、夏の大会から試験的に導入されるんだよ」

となると新しい形式……………？

「もう……………まで言えば何となくはわかるんじゃないかな？夏の大会から試験的に導入される新ルール。それはズバリ！『団体戦』だよ！」

姉貴は部室内にあったホワイトボードを裏面にひっくり返す。するとそこにはいつもの間に書いたのか、上半分くらいを占める大きな『団体戦』と書いてあった。トゲトゲの吹き出しとバーンという擬音語と一緒に。

え？これ仕込むためにさっさと部室に引き上げたの？姉貴のノリについていけてないのか、みんなポカーンとしてるし。とりあえず師匠なら何か知ってるだろ。コールしてみよ。

「……………団体戦だよ！」

『いきなりやかましいぞツバキ！』

「ハイゴメンナサイ」

俺らが無反応だったからか、姉貴は最後のとこだけまた繰り返す。そしてタイミング良く（悪く？）それが師匠に繋がったのと被ってしまい早々に怒鳴られる姉貴。

『つたく……………まあ、今ので何となく察した。とりあえずツバキ、俺の説明終わるまでここに正座。空翔、ツバキの膝になんか重り乗せとけ。あとついでにツバキに持たせた資料配ってくれ』

「あいよー」

「そんな殺生なあ……………」

んーと……………とりあえず中身が満タンのペットボトル（2L）3本ほどでいいか。姉貴の持つてる資料……………これか？ホワイトボード横に引っ掛けてるヤツ。ああ、これだ。団体戦要項って書いてある。

「ヒザイダイ……………」

「師匠には逆らえんのです、すまん姉貴」

半泣きの姉貴が少し可哀想だけど、相手が師匠だから……………ごめんね？

『資料は行き渡ったか？……………あー、最初に言っておくが、この後説明出来ないくらい騒いだらツバキと同じ刑だからな？まず自己紹介だ。俺は神代龍月。そこにいるツバキの従兄弟で空翔と沙希の師でもある。こっちはまだ忙しいから、細かいことはまた後ほ



どになるが………』

師匠が用意していた資料は色々難しいことが書いてあつて師匠の説明も15分くらいかかっていたけど、それを簡単にまとめるとこうなる。

①1チーム6人にて3人制で試合を行う。試合は順にを先鋒戦、中堅戦、大将戦と呼称する。

②レギュラーメンバーは予め登録しておき、緊急の場合を除いて交代は認めない。

③無効試合等の理由により引き分けとなつた場合、試合に出場した3名より代表1名選出し、追加の試合を行う。

④第2試合においてのみ、第1試合目未出場メンバーのみで構成すること。それ以降の編成は自由とする。また、第3試合目までにメンバー全員が必ず試合をすること。

⑤試合そのもののルールは個人戦と同様。

『とまあ、ざっと説明したがこんなところだ。申し訳ないが、今は質問は受け付けられないから、ツバキにしてくれ。ツバキでも答えられないことは後ほど俺の方から答える。急ぎ足になってすまないが、これから会議があるんだ。切るぞ?』

「了解。ありがとう、師匠」

『ああ、それとウチの空翔とポンコツ従兄妹のことをよろしく頼むな』

「師匠（龍月くん）?!?!」

師匠爆弾投下して通話切っちゃった!?

……まあ、いいか。とりあえず姉貴を解放しておこう。

「あーうー………お膝真つ赤だよお」

「まあ、ここは元々バスだし基本土足らしいし………」

練習中はMIZUKI社で販売してるジャージだったけど、今は私服で下は膝くらいまで隠れるタイプのスカートだからな。

「あー、コホン。とりあえずみんな、龍月くんの説明でわかったかな？ 質問あれば聞くよー？」

「はいっ！」

「はい、明日香ちゃん」

出た、姉貴の得意技(?)の瞬間真面目モード早変わり。この切り替えの早さはいつ見てもすごいよな。

「3人制ってどういう意味ですか!？」

ズデーン

そっからかいっ!?

いや、見事にずっこけたよ。明日香ちゃん以外全員。ある意味で明日香ちゃんらしいか。

「えーっと、剣道の団体戦はわかる?」

「わかりませんっ!」

「簡単に言えば、チームから3人選んで1人ずつ試合をして、2勝先取でそのチームの勝利ってことだよ」

「あー、なるほどです」

ま、小難しく書いてはいるけど、要はそういうことだからな。剣道とかテニスとかの団体戦と同じ様なルールだね。

「でもこのルール、よく出来てるよ。この手の団体戦でよくあるチームの切り札の温存を認めない仕様になってる」

「さすが窓果さんも気付きました?」

「えー?どういうことよ?」

お、マネージャー2人組は面白い所に目をつけてる。みさきちゃんはそのまで分らないって風だね。見たところ真白ちゃんと沙希ちゃんもかな。

「晶也さんはわかりました?」

「ああ、面白いよ。このルールは。第4項、ですよね?ツバキさん」

さすが晶也もずっとコーチしてただけある。この第4項はこの団体戦で戦略的にも大きい意味を持つ……と俺は勝手に思う。そういうルールだ。

「ツバキさん。どういうことですか？」

「えつとね、この手の団体戦は特定のメンバーを温存するって戦略は鉄板だよな？先に見せたら対策されるから。窓果ちゃんが言うように切り札として温存するんだよ」

「うんうん。スポーツ漫画とかでもよくあるよね。某アメフト漫画の神○寺ナ○ガ戦での雪○みたいな」

「例えがものすごくアレだけど、正解だよ。で、このルールだとね、メンバーは全員で6人で試合は3人制でしょ？単純計算で2試合目で総入れ替えすれば全員試合に出たことにはなるよね。そこまではわかる？」

「確かにそうですね。1試合3人なので2試合すれば全員出場しま……あれ？でも2勝先取だと大将は試合しない場合もありますよね？」

お、真白ちゃん面白い所に気づいたな。ま、ここで俺が口出したら姉貴が拗ねるから黙つとこい。

「だからこう書いてあるでしょ？『第3試合目までにメンバー全員が試合に出ること』って」

「あ、なるほど！もしストレート勝ちして大将戦がなかった場合でも大将が第3試合の先鋒か中堅になれば」

「そうだよ。全員平等に試合に出るから温存はできない。けど、それ以降は自由だから、

あえて圧倒的な力を先に見せておいてこいつもいるぞって圧力をかける作戦も取れる。ある意味で戦略性が高いルールなんだよ。これは余談だけど、実際に選手を何人も招集してテストプレイはしたみたいだよ。その中にみんなの知ってる選手もいるね」

姉貴の最後の一言。これを聞いて配られた資料に釘付けになる久奈浜の面々。そのリストの中にあつたのは真藤一成、青柳紫苑の2人の名前だった。

「真藤さん!?!」

「お兄ちゃんも!?!3月になって東京行つたと思つたらこれだったの!?!」

実の妹の窓果ちゃんすら知らなかったらしい。まあ、機密だろうし仕方ないか。

……………まあ、それはそれとして1つ気になる。

「なあ、姉貴。確認なんだけど、団体戦って6人1チームだよな?」

「そうだよ。書いてあるとおおり」

「……………人数足りなくね?」

俺の一言でハッと気付き、メンバーの人数を改めて数える晶也、明日香ちゃん他数名。マネージャー2人を除いて、晶也、明日香ちゃん、みさきちゃん、沙希ちゃん、真白ちゃん。5人しかない。

「ホントだ……………1人足りない」

「はわわわわ……………どうしましょう!?!こうなつたら部長さんが選手になるしか!」

「ならないよ!？」

「え?人数足りてますよね?」

晶也と明日香ちゃん、窓果ちゃんが慌てる中、比較的落ち着いてる真白ちゃん、沙希ちゃん、みさきちゃん、あとリーナちゃん。

え?足りてる?そんなバカな。

「晶也。誰か除け者にしたんじゃないの?」

「いや、待てみさき。さすがにこの人数でそれは無いだろ」

「晶也さんにみさきちゃん、真白ちゃん……沙希ちゃん……4人しかいません!」  
「明日香ちゃん、そろそろ自分をカウントしよ?」

だよな?足りてないよな?

「空翔は飛ばないの?」

「そうですよ!空翔先輩を数えてませんよ!」

………はい?

「いや、俺そもそも部員じゃ………」

「あ、それなら空翔くんの入部届けは私が出しておいたよ」

姉貴いい!?!

「それにね?見てみて?」

「え?」

姉貴に言われて指さす方向、みんなの方を向いてみる。

「[[[[[[「ジュー……………」]]]]]]」

「このみんなの期待を裏切る勇氣はあるのかな? ジュニア世界チャンピオンの天野空翔くん?」

ぐあああ……………みんなの視線が痛いっ! まさか師匠はここまで読んだ上で俺の転入を計画したのか?! しかも実行犯は姉貴!

「謀つたな姉貴っ!!」

「ふっふっふー。あんな師匠を持った己の不幸を呪うがいいっ!」

やられた……………完全にしてやられた。ここでN0って言ったら明らかに俺悪者じゃないか! 断る理由も特にならないから余計に夕チが悪い! よし、こうなったら……………

「よし姉貴もう一度言ってみろ!」

「空翔くんにしては生意気だな? あんな師匠を持った己の不幸を呪うがいい!」

よし、録音完了。姉貴ってこういう厨二っぽい言葉何かと使いたがるからな。あとは師匠に送って、と。

「くっそお……………考えてみれば不自然過ぎたんだよな、俺が転入する意味が全くないし。そういうことか」

「空翔先輩……………その……………ダメですか？」

まあ、してやられたこと何も思わない訳では無いけど……………とりあえず姉貴のことはスルー。

「だああ！わかったよ。俺も入れてくれ！」

この後部室内が歓声に包まれたのは言うまでもない。

「で、なんで私はあれを2回言わされたのかな？」

「ん？『あんな』師匠って言ってたこと、録音して師匠に送っておいたから」

「に〴〵や〴〵っ〴〵!？」